

令和2年度 埋蔵文化財担当職員等講習会

— 発 表 要 旨 —

文化庁

令和2年8月26日(水)

令和２年度 埋蔵文化財担当職員等講習会 日程

【令和２年８月２６日（水）】

- | | | |
|-------------|-------|---|
| 13:30～13:40 | 開会挨拶 | 鍋島 豊（文化庁文化財第二課長） |
| 13:40～14:35 | 講 義 1 | 埋蔵文化財保護行政の現状と課題
近江 俊秀（文化庁文化財第二課主任文化財調査官） |
| 14:35～15:10 | 講 義 2 | 埋蔵文化財保護行政における人材育成について
川畑 純 （文化庁文化財第二課文部科学技官） |
| 15:10～15:25 | 《休 憩》 | |
| 15:25～16:25 | 講 演 | 大学における人材育成と埋蔵文化財行政
福永 伸哉（大阪大学大学院文学研究科） |
| 16:25～17:00 | 講 義 3 | 水中遺跡のてびきの作成について
発掘調査費用の積算等に関する実態調査結果（速報）
藤井 幸司（文化庁文化財第二課文化財調査官） |

目 次

講 義 1	埋蔵文化財保護行政の現状と課題	1
	近江 俊秀（文化庁文化財第二課主任文化財調査官）	
講 義 2	埋蔵文化財保護行政における人材育成について	7
	川畑 純（文化庁文化財第二課文部科学技官）	
講 演	大学における人材育成と埋蔵文化財行政	11
	福永 伸哉（大阪大学大学院文学研究科）	
講 義 3	水中遺跡のてびきの作成について	
	発掘調査費用の積算等に関する実態調査結果（速報）	21
	藤井 幸司（文化庁文化財第二課文化財調査官）	
埋蔵文化財の活用に関する取組事例の紹介		27
	（1．青森県南部町／2．秋田県北秋田市教育委員会／3．栃木県栃木市／4． 千葉県大網白里市教育委員会／5．東京都西東京市／6．石川県／7．岐阜県 飛騨市／8．滋賀県日野町教育委員会／9．和歌山県立紀伊風土記の丘／10． 広島県尾道市（尾道遺跡発掘調査研究所）／11．長崎埋蔵文化財センター／12． 熊本県玉東町教育委員会／13．宮崎県都城市）	

埋蔵文化財保護行政の現状と課題

近江 俊秀（文化庁）

1. 文化財保護法改正とこれからの埋蔵文化財行政

- 平成31年4月1日に施行された、改正文化財保護法のふたつのねらいを知る
 - ねらい1 文化財の次世代への確実な継承を目指す 第一次答申
 - ねらい2 文化財を観光資源として利用する 第196回国会 総理施政方針演説
- このふたつのねらいを受けて行われている諸施策
 - ・国際観光旅客税を財源とした諸事業の開始
 - ・人材育成のための事業の充実
 - ※濃淡は別にしても、ともに国の施策に則った取組であること。
 - ※これらの施策をどう実体化するか、適切な方向に向かわせるか
- 改正法が埋蔵文化財保護に及ぼす影響を考える
 - 埋蔵文化財保護制度の成り立ちに立ち返って今の立ち位置を知る
 - ※それぞれの立場で何ができるか。なにをすべきか。行政の意志決定へどう関わるか。

2. 埋蔵文化財部門の新たな取り組み

（1）人材育成

- 文化財保護行政は専門的な行政分野であり、専門的知識を有する職員の養成・確保は必要不可欠（第一次答申・附帯決議）
- 一方で長期に及ぶ専門職員採用の停滞や大学教育の在り方の変化等により職場での知識・技術継承や採用後の育成についても見直す必要が生じている
- 加えて、公務員定数の削減や業務の多様化等の問題もあり、専門知識の蓄積以外にもさまざまなスキルが求められる
 - どのような人材を求め、どう育てていくか、そのために何をすべきか
- 【取組1】埋蔵文化財保護行政基礎講座の地方開催
- 【取組2】埋蔵文化財専門職員の育成について（報告） 川畑報告
- 【取組3】文化財マネジメント職員養成研修

（2）埋蔵文化財の魅力発信

- 文化財の観光利用に象徴されるように、何事につけても費用対効果が求められる時代になりつつある反面、直接的な経済効果は期待しがたいが、地域の誇り、シンボルとして広く住民に認知されている文化財が存在している。
- 埋蔵文化財が地域住民にとって価値あるものと認識してもらうためには、その魅力を積極的に発信する必要がある。
 - 単体としての魅力、他の文化財とセットとなった複合的な魅力、自然・文化と一体となった地域の魅力を形作る重要な要素としての価値
 - ※地域の埋蔵文化財の価値を全国に発信する機会を設け、価値を地域に還元すること
 - ※さまざまな取組を共有し、施策立案のためのヒントとすること
- 【取組1】発掘された日本列島展における地方公共団体の企画提案の募集（資料1）
- 【取組2】埋蔵文化財担当者等講習会等を利用した全国の取組の発信（資料2）

【取組３】奈文研と行う埋蔵文化財に係る動画のプラットフォーム作成

3. 昨今の情勢 国土交通省行政事業レビュー

- 積算の透明性・客観性が再度、問われた事案
- ３年計画で対応を検討
 - ①積算・精算に関するアンケート調査の実施（令和２年度上半期）
 - ②ワーキンググループを設定し検討（令和２年度下半期）
 - ③ワーキンググループによる改善案の作成
 - ④上記改善案に基づき実証実験（令和３年度）
 - ⑤実証実験結果の検証委員会の設置と指針の作成（令和４年度）

4. 水中遺跡のてびきの作成

藤井報告

5. その他、留意すべき事項

- 埋蔵文化財専門職員に求められるモラルに係ること
 - ・出土文化財の保存処理・分析等について（岩手県立博物館の事案）
- 発掘作業における安全管理について
 - ・令和元年７月の熊本市における事故
- 補助金等の事務に係ること
 - ・計画変更未提出により不用となる事例の多発
 - ・埋蔵文化財専門職員による不適切な事務
- 全国に支援を求める可能性がある大規模事業
 - ・米軍沖縄基地再編に伴う発掘調査について
 - ・成田空港新滑走路建設に伴う発掘調査について

6. まとめ

現代社会への対応

- 現在は、社会の様々な分野で転換期を向かえている。埋蔵文化財行政も例外ではない。
- まずは、正確な情報を積極的に収集することが重要ではないか？
- 同時に自らが取り扱う情報の精度・質の検証も必要
- 良質な情報を正しく分析することをつうじた施策の立案。それぞれの立場に応じた役割分担と協業体制の構築（問題意識の共有により実現）

埋蔵文化財の価値の発信

- 文化財活用においては、主語は「文化財」であるべき。
- 埋蔵文化財の価値を正しく、分かりやすく伝えることは埋蔵文化財専門職員の業務の根幹であり、それが文化財保護施策の根幹にもなる。

事務連絡
令和2年4月9日

各都道府県埋蔵文化財保護行政担当者 殿

文化庁文化財第二課
埋蔵文化財部門

「発掘された日本列島2021」展の展示候補遺跡の推薦について（依頼）

日頃より、埋蔵文化財保護行政の推進に御尽力いただき、誠にありがとうございます。

文化庁では、平成7年度より埋蔵文化財の公開普及事業として、「発掘された日本列島」展（以下「列島展」という。）を開催しております。実施にあたりましては、例年、各地方公共団体をはじめとした多数の機関・関係者の方々の御協力・御支援をいただいております。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。おかげさまで令和2年度の列島展の準備も進んでおり、令和3年度も、本事業を継続する予定で準備を開始しております。

さて、令和3年度の列島展はこれまでの「新発見考古速報」展に加え、新たに「我がまちが誇る遺跡」展を立ち上げることといたしました。この企画は個性豊かな遺跡が紡ぎ出す「地域の歴史の魅力」を幅広く発信しようというもので、地方公共団体の企画提案を受けて、展示を行おうとするものです。できるだけ多くの埋蔵文化財保護行政関係者の手で作り上げるという列島展のコンセプトに基づき、「新発見考古速報」展とともに、各都道府県より推薦をお願いすることにしております。

ついては、別紙及び別添に御留意いただいた上、管内市町村の御意見をとりまとめ、7月31日（金）までに、別紙2の回答用紙に記入のうえ郵送もしくはメール（5MB以下）にて、当課埋蔵文化財部門へお寄せ下さい。

何かと御多忙のこととは存じますが、御協力のほど、よろしくお願いします。

[本件担当]
文化庁文化財第二課
埋蔵文化財部門 芝 康次郎
TEL (03) 5253-4111（内線 2879）
(03) 6734-2876（18:30 以降）
FAX (03) 6734-3822
Mail shibak@mext.go.jp

事務連絡
令和2年4月9日

都道府県文化財部局
埋蔵文化財保護行政担当者 殿

文化庁文化財第二課
埋蔵文化財部門

埋蔵文化財の活用に関する取組事例の紹介について（依頼）

文化庁では、毎年、都道府県の協力を得て「埋蔵文化財担当職員等講習会」（以下「本講習会」という。）を開催しています。本講習会では、各地方公共団体が行っている埋蔵文化財の活用事例等について御報告頂いていますが、限られた時間内での口頭報告のため全国に紹介できる事例は限られています。

埋蔵文化財の活用に関する取組が各地で活発に行われている昨今、より多くの地方公共団体等の取組を共有することは、埋蔵文化財の活用を推進するためにも有効であると考えます。そこで本講習会で配布する資料の紙面並びに文化庁ホームページにおいて、各地の取組事例を御報告いただく機会を設けることとしました。

については、貴組織及び貴管内の市町村、埋蔵文化財発掘調査組織が実施している埋蔵文化財の活用等に関する取組を、下記の要領で幅広く募集します。都道府県においては、このことを管内市町村（政令指定都市・中核市を含む）に周知頂きますとともに、応募をとりまとめの上、下記担当宛にご連絡下さるようお願いします。

記

1 御紹介頂きたい事業

埋蔵文化財を用いた活用事業であり、かつ地方公共団体（埋蔵文化財担当部局）が関与する事業（共催・後援事業であっても可）であれば内容は問いません。

○埋蔵文化財のみではなく、他類型の文化財も含めた活用事業も可。

○過去に本講習会をはじめとする文化庁が行う研修会等で報告したものも可。

2 応募方法等

①報告を希望する場合は、別紙1に必要事項を記載し都道府県を経由の上、下記担当宛に、メール若しくはFAXでご応募下さい。

②文化庁で内容を精査の上、掲載事業を決定し、掲載決定組織宛に執筆依頼を送付します（前期・後期ともに5件程度、年間10件程度を掲載予定。前期・後期のいずれの掲載とするかは文化庁で決定します）。

③掲載する原稿はA4版2頁程度を予定しています。掲載原稿の提出締め切りは令和2年7月中の予定です。

※写真・図面等の掲載にあたり著作権等の手続きが必要な場合は、報告者側で行って下さ

い。また、原稿はインターネット上での公開を予定していますので、著作物の電子化に関する承諾も併せてお願いします。

3 回答期限

令和2年6月12日（金）

4 令和2年度の講習会

前期：宮城県仙台市 ホテル白萩

令和2年8月26日（水）～28日（金）

後期：熊本県熊本市 熊本県庁地下大会議室

令和3年2月 3日（水）～ 5日（金）

○詳細については開催県から別途、御案内します。

[本件担当]

文化庁文化財第二課

埋蔵文化財部門 藤井 幸司

TEL (03) 5253-4111 (内線 2879)

(03) 6734-2876 (18:30 以降)

FAX (03) 6734-3822

Mail ko-fujii@mext.go.jp

埋蔵文化財保護行政における人材育成について

川畑 純（文化庁）

『埋蔵文化財専門職員の人材育成について』（報告）の概要

- 埋蔵文化財行政の適切な推進には埋蔵文化財専門職員の計画的な配置と育成が不可欠。
- 体系的な人材育成プランの構築のため、埋蔵文化財専門職員を資質能力の段階に応じてⅠ種（基礎知識の習得段階）・Ⅱ種（実践能力の取得段階）に区分。
- 今後は資質能力の段階区分に応じ、国・都道府県・市町村が一体となった体系的な人材育成プランを構築し、埋蔵文化財専門職員の資質能力の向上を図ることが望まれる。

第1章 今回の検討課題について

- 過疎化・少子高齢化が進行する中で、文化財を次世代へ確実に継承するためには、文化財に係る専門的知見を有する人材の育成及び配置が重要。
- 適正な埋蔵文化財行政を担う体制づくりと人材育成は一体不可分の関係。
- そこで、埋蔵文化財専門職員の育成に関する現状と課題を整理し、採用の在り方、資質能力の可視化・段階区分とその把握による適正な体制の構築、育成方法について検討。

第2章 埋蔵文化財専門職員の育成に関する現状と課題

- 採用時の条件の多様さにより、初任者の資質能力に大きなばらつきが生じているとみられ、採用後の知識や技術レベルの差の拡大が懸念される。
- 埋蔵文化財専門職員の資質能力を可視化できないことで、①対外的に職掌を示す客観的な指標がない、②その資質能力の実態を正確に把握するうえで問題、③方針・ルールを定める上で対象が曖昧であると実効性が低下、という問題が生じている。
- そこで、埋蔵文化財専門職員を知識や経験といった資質能力により段階区分し、段階に応じた育成目標の設定、育成プランの構築が必要。これにより、埋蔵文化財行政の専門的な観点での信用性の向上、埋蔵文化財保護体制の整備状況の客観化につながる。

第3章 埋蔵文化財専門職員の採用の在り方について

- 大学では十分な発掘調査経験を積む機会が乏しいのが現状。行政は連携しつつ、合同発掘調査や発掘調査インターンシップを実施する等の取組を進めることが有効。
- 発掘調査経験や報告書作成経験を採用試験の募集要件とすると応募者の大幅な限定につながる恐れがある。採用後に業務の中で実務経験を蓄積させる育成方法が望ましい。
- 採用の在り方としては、専門知識を客観的に測ることができる点で専門試験の実施が適切。加えて大学・大学院での専攻の要件を厳格化する方法なども有効。

第4章 埋蔵文化財専門職員の資質能力の段階区分

- 埋蔵文化財専門職員に求められる基本的な能力は、いくつかの段階を経て取得される。
- そのため、埋蔵文化財専門職員の資質能力の取得状況は、基礎知識を取得した段階と実践能力を取得した段階の二段階を設定することが適当。
- 基礎知識を取得した段階にある者を埋蔵文化財専門職員（Ⅰ種）、実践能力を取得した段階にある者を埋蔵文化財専門職員（Ⅱ種）とする。
- この段階区分は「埋蔵文化財専門職員の資質能力の段階区分に関する基準」を基に行い、段階区分の状況は市町村等の所属組織からの申告により都道府県・国とも共有する。
- 埋蔵文化財専門職員の資質能力に基づく段階区分により、第2章で整理した課題を解消できるほか、下記のことが可能となる。

都道府県：管内市町村に対し①体制に即した助言、②体制に即した支援、③体制、能力に応じた権限付与、④埋蔵文化財専門職員の資質能力に応じた研修等の実施。

市町村：①自らの埋蔵文化財行政を担う体制の客観視と体制整備に向けた具体的な目標設定、②埋蔵文化財専門職員の資質能力に応じた育成目標と育成方法の具体化。

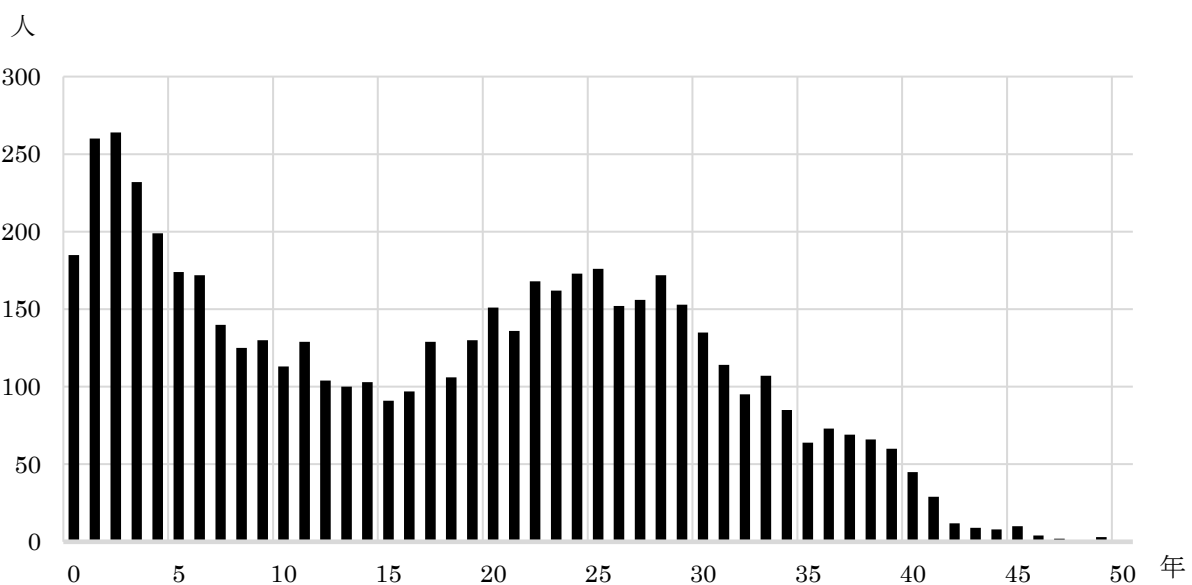
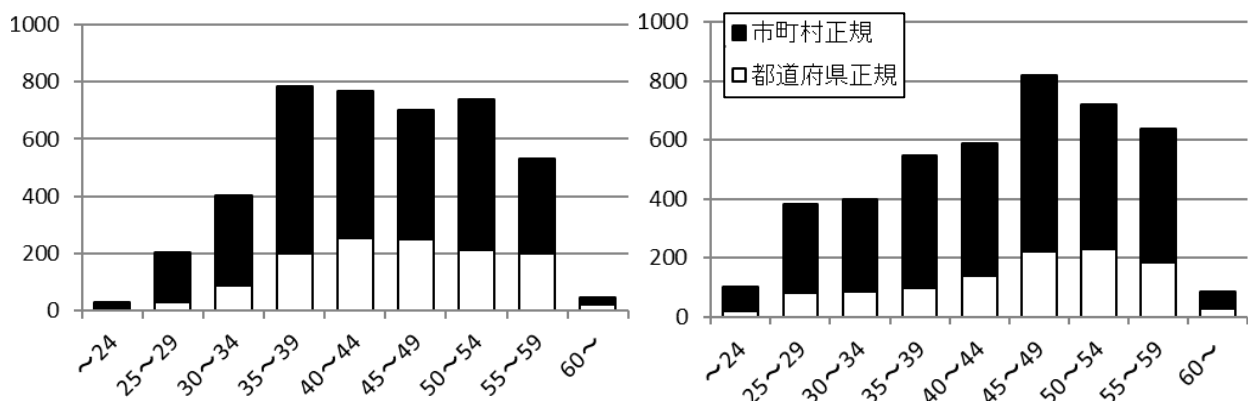
- 全ての埋蔵文化財専門職員が埋蔵文化財行政に係るあらゆる業務を実施できる資質能力を高度なレベルで身に付けることが本来の理想。ただし、現実的には、所属組織・職掌・職員個々の個性等に応じた資質能力の向上が求められる。

第5章 育成の方法

- 埋蔵文化財専門職員の育成に関する基本事項は次の通り。
 - ・人材育成は任命権者の責任で行うことが基本。ただし、組織の規模や事業量の違いもあるため、国・都道府県・市町村の連携が重要。
 - ・研修は目的・役割を明確化し、研修開催者側が情報を共有して実施組織の枠を超えた体系的な研修プランの構築が必要。都道府県等では国等の研修での取り扱いが少ない、発掘調査技術や地域的特性等に関する研修の企画・実施が望まれる。
 - ・職場における学習的風土を作り上げるとともに、十分な知識・経験を蓄積した埋蔵文化財専門職員は後進の育成という視点をもって業務に当たることが求められる。
 - ・地域研究の業務としての位置づけは、埋蔵文化財専門職員の専門性の向上と高度な専門性に基づく良質な成果を一般に提供することにつながる。また、他組織との人事交流やジョブローテーションは個人のスキルアップ、組織の充実に資する。
- Ⅰ種の専門職員の育成は、個々の能力の不足に応じてバランスよく能力の向上を図り、考古学に関する知識の蓄積、発掘調査能力の取得、埋蔵文化財行政に関する基礎知識の取得を通じて実践能力を取得させるよう努めることが必要。
- Ⅰ種の要件に満たない職員を継続的に埋蔵文化財行政に携わらせようとする場合、基礎知識の程度を確認した上で、Ⅱ種の基準を満たす能力取得を育成目標とすることが必要。
- 埋蔵文化財行政を担う体制は組織の規模による違いが大きく、それにより求められる資質能力が異なる側面があるため、Ⅱ種の専門職員は組織や職掌に応じた業務に対応する能力を優先的に取得させるなど、多様な業務に応じた育成が必要。
- その上で、組織として多様な分野にバランスよく対応できるような人的構成を整えるための体系的な人材育成プランの構築が必要。

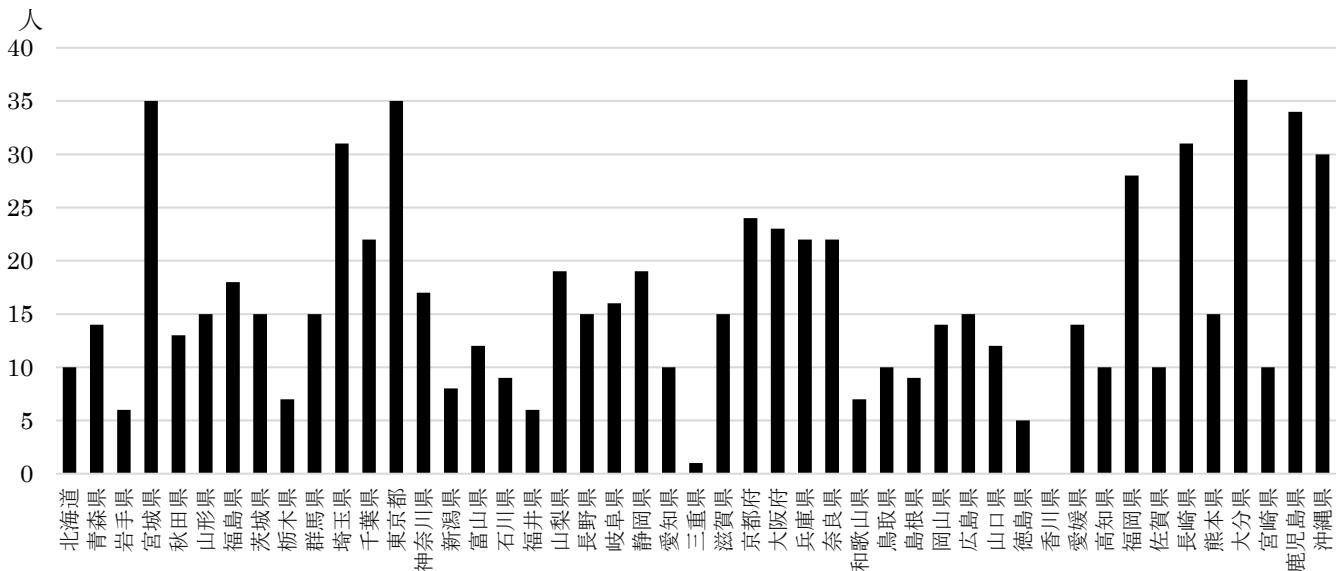
令和元年度・令和2年度の埋蔵文化財基礎講座の実施状況

開催自治体等	期間	場所	人数
福岡県	R1. 6. 19	九州歴史博物館	125 人
山形県	R1. 7. 2	村山総合支庁本庁舎	45 人
鹿児島県	R2. 1. 16	鹿児島県埋蔵文化財センター	約 50 人
宮城県	R2. 1. 29	東北歴史博物館	62 人
新潟県	R2. 2. 14	新潟県庁	62 人
宮崎県	R2. 6. 26	宮崎県立図書館	約 50 人
岐阜県	R2. 7. 21	岐阜県図書館	46 人



【参考】 令和2年度埋蔵文化財担当職員等講習会 受講申込の動向

	申込件数	申込組織数		申込件数	申込組織数
北海道	10	8	滋賀県	15	7
青森県	14	8	京都府	24	11
岩手県	6	4	大阪府	23	12
宮城県	35	19	兵庫県	22	15
秋田県	13	6	奈良県	22	11
山形県	15	10	和歌山県	7	4
福島県	18	9	鳥取県	10	4
茨城県	15	11	島根県	9	7
栃木県	7	5	岡山県	14	6
群馬県	15	9	広島県	15	8
埼玉県	31	16	山口県	12	8
千葉県	22	17	徳島県	5	4
東京都	35	17	香川県	0	0
神奈川県	17	13	愛媛県	14	10
新潟県	8	5	高知県	10	7
富山県	12	6	福岡県	28	12
石川県	9	6	佐賀県	10	4
福井県	6	3	長崎県	31	14
山梨県	19	7	熊本県	15	9
長野県	15	9	大分県	37	11
岐阜県	16	12	宮崎県	10	9
静岡県	19	11	鹿児島県	34	17
愛知県	10	5	沖縄県	30	13
三重県	1	1	合計	765	420



大学における人材育成と埋蔵文化財行政

大阪大学文学研究科 福永 伸哉

1 はじめにー日本の大学と考古学ー

2 大学における考古学教育の現状

(1)考古学専攻・コースの設置状況

(2)考古学専攻生の動向

(3)大学で提供する考古学教育

3 大学の考古学教育がかかえる諸課題

(1)零細な教育体制と困難さを増す発掘実習

(2)「履修単位の実質化」と学生気質の変化

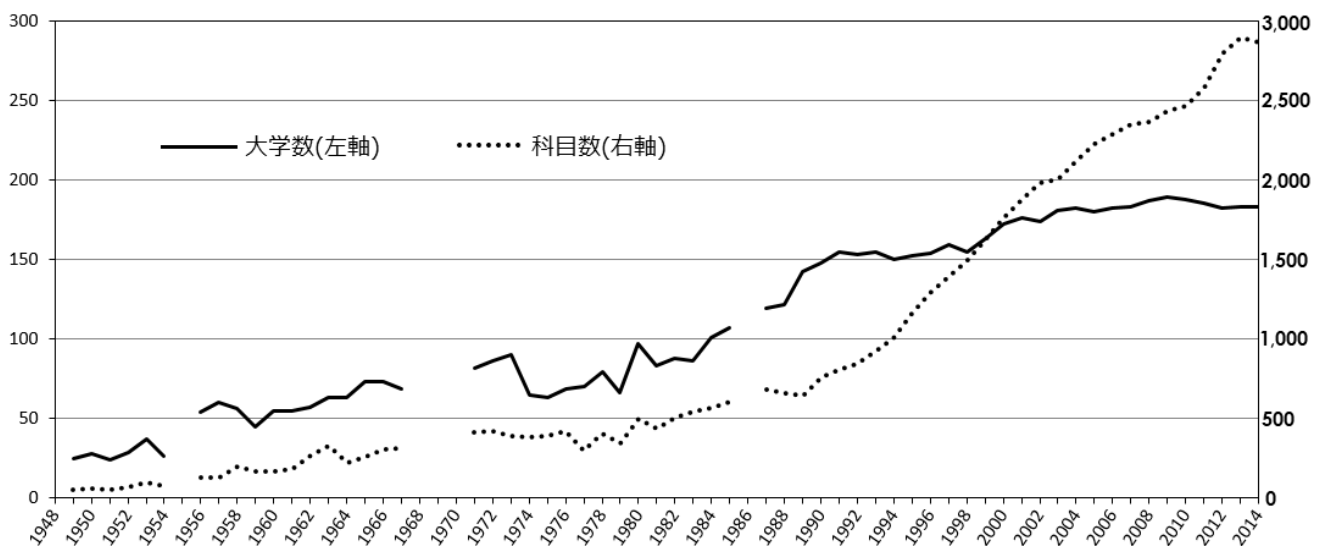
(3)教育プログラムの多様化と「考古学専攻生」の認証

4 今後の人材育成への展望

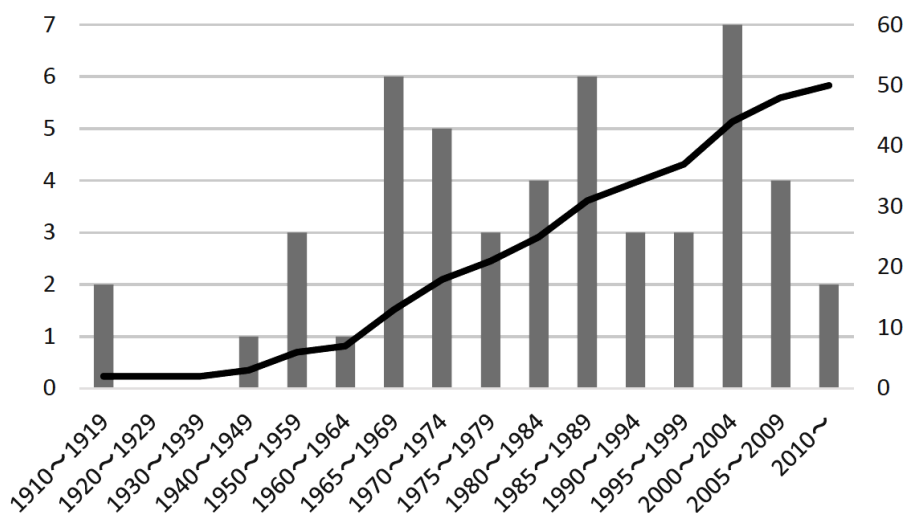
(1)大学間の連携

(2)大学と埋蔵文化財行政の連携

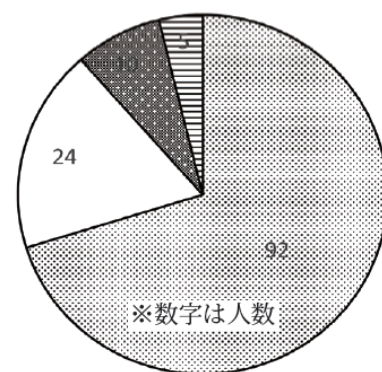
(3)「文化芸術立国」をささえる人材育成のために



①考古学関係授業の開講大学数と開講科目数の推移 (福永 2016)

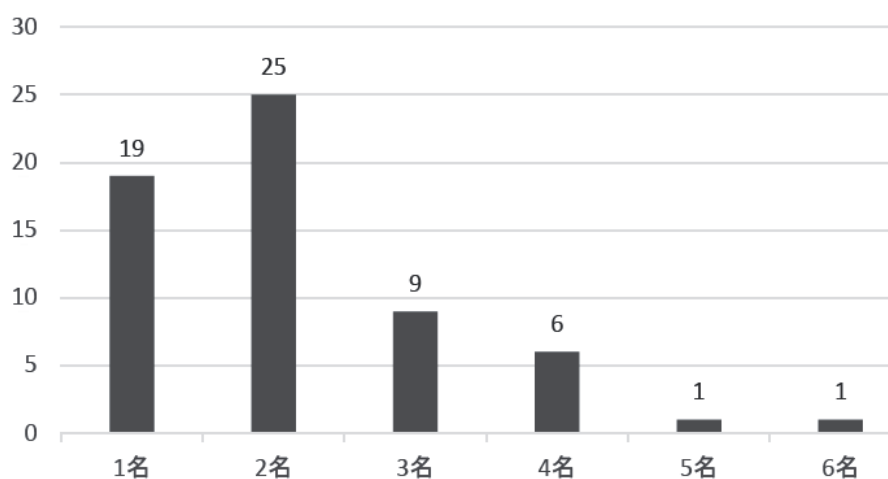


1. 考古学専攻・コースの設置年度（50 大学）（日）

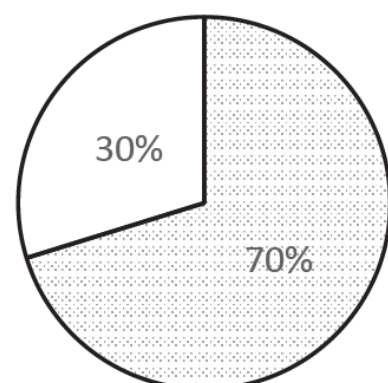


- 日本考古学
- 東アジア考古学
- その他の外国考古学
- その他

4. 専任教員の主たる専門分野（日）

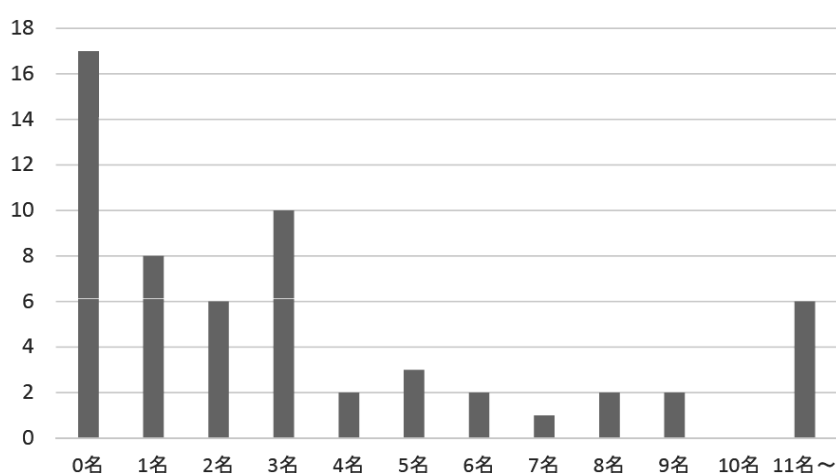


2. 専任教員の数（61 大学）（日）

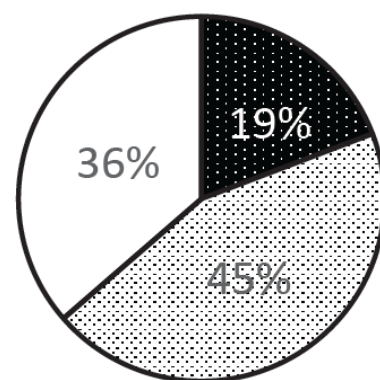


- 専門職経験者
 - 非専門職経験者
- (N=131)

5. 専任教員の考古学系専門職経験（日）



3. 非常勤教員の数（59 大学）（日）



- 専門職退職後
 - 専門職在職中
 - 専門非経験
- (N=250)

6. 非常勤教員の考古学系専門職経験（日）

②組織と教員

以下のグラフは日本考古学協会 2015 年度奈良大会アンケート調査（日）及び文化庁 2020『埋蔵文化財専門職員の育成について（報告）』所載のアンケート調査（文）による。※レイアウト等一部改変あり。

大学における考古学の研究・教育の拡充を要望する決議

近年の開発に伴う遺跡の破壊に直面して、遺跡の調査と保存の体制の拡充は最も重要な課題であります。

このためには、国と自治体の埋蔵文化財保護の体制の充実が必要なのはいうまでもありません。さらに大切なことは、これに従事する研究者を養成する体制の拡充であります。ところが研究者の養成において重要な役割を果たすべき機関の一つである大学における考古学の教育・研究体制は必ずしもこれに 대응するものとは言えない現状にあります。

いま全国には文化財の保存と調査に携わる約三〇〇〇人の専門職員がおり、どの都道府県にもかなりの数の担当者がいますが、これを養成するための大学における考古学の教育体制は極めて貧弱であり、現在の要請に充分に対応できていないのが実状であります。

また基礎的な研究活動において大学の考古学研究者に求められていることは数多くありますが、研究費や設備・備品において大学の現状はこれとは程遠いものがあります。

ちなみに大学において考古学の専攻あるいは研究室あるいは研究施設が置かれているのは、国立大学では二十大学、私立大学では十六大学であります。これ以外にも考古学を専攻する教員がいて研究・教育に携わっている大学があるとはいえ、考古学の専攻や研究室をもつ大学を有する都道府県の数が半数に満たないということは現在の要請にいかに対応できていないかを雄弁に物語っております。

さらに、既に専攻や研究室がある大学においても、教員の数や研究・教育費があまりにも少なかったり、実験講座になっていないために最低限の教育・研究さえできないところがあります。また、近年は遺跡の発掘や資料分析の方法が著しく向上し、自然科学的方法を取り入れる研究が不可欠となり、各種の高額な機器や装置が必要となっているにもかかわらず、ほとんどの大学では考古学は文科系に所属するために、たとえ実験講座になっていても、予算の上でこれに充分対応することができないのが実状であります。この現状で組織的な研究を遂行するためには、科学研究費などの利用もありますが、考古学の研究の現状が必要とするものと比較すれば、まだまだその枠は広くありません。

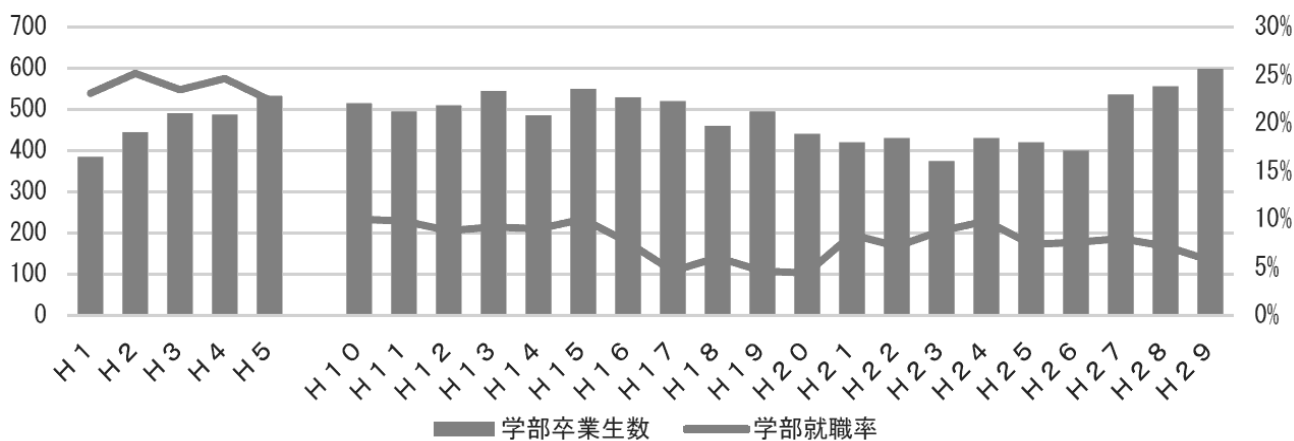
また、大学の構内に存在する遺跡調査のために、いくつかの大学では調査委員会や調査室が設けられておりますが、定員措置等が不十分なために、考古学教員の負担が過重となり、そのために本来の研究・教育に支障をきたす事態が多く大学の生じております。

このような現状に鑑み、考古学の教育と研究の体制の拡充のために、国や自治体の関係当局ならびにそれぞれの大学当局に私たちはつぎの諸点を要望し、現状の改善のための御協力をお願いするものであります。

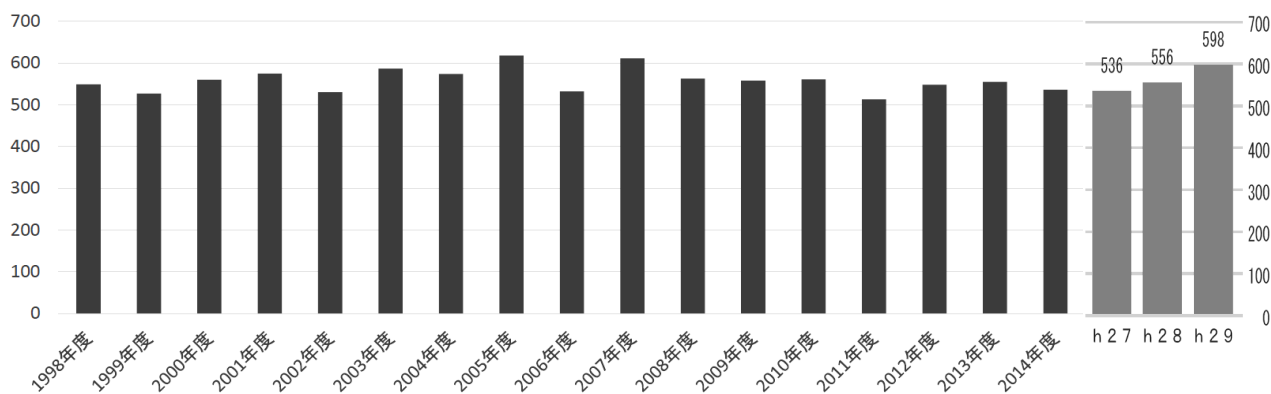
- 一 大学における考古学の専攻あるいは研究室をさらに多く設置されたい。当面、考古学の研究室をもつ大学のない都道府県では、最低一つの大学に講座あるいは専攻あるいは研究室を設置すること。
- 二 すでに設置された大学における考古学の拡充のために教員数と設備・備品の拡充をはかること。
- 三 大学構内に存在する遺跡の調査体制については、その定員措置を含めて、現状の改善措置をはかること。
- 四 大学の研究においても大きな比重を占める科学研究費の大幅拡大をはかるとともにとくに考古学の枠を増額すること。

以上

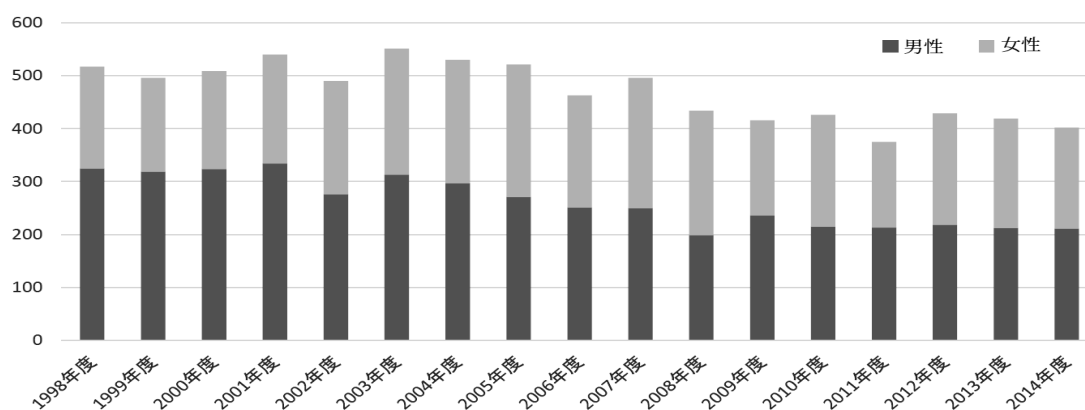
一九八七年五月二日
日本考古学協会第五三回総会



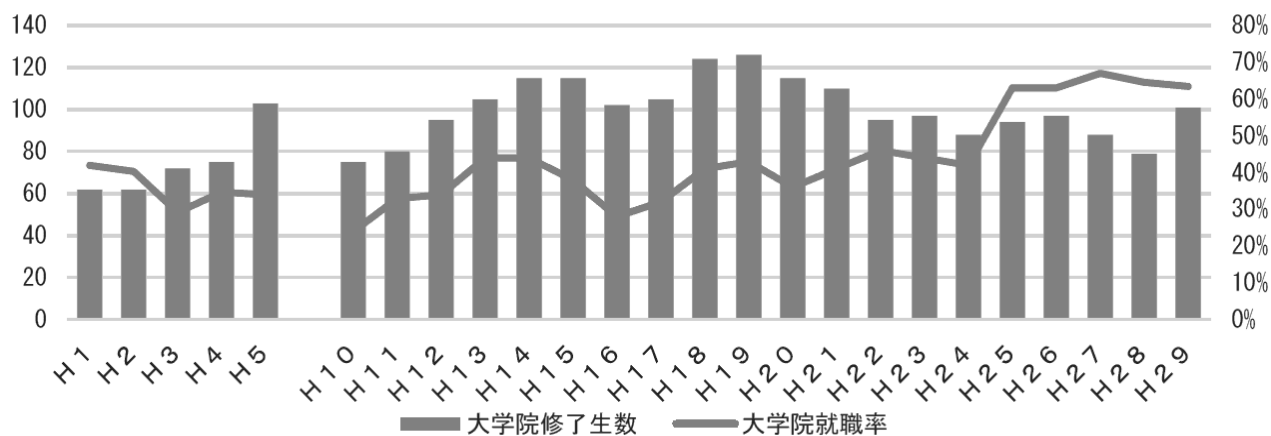
1. 学部卒業生数と専門職就職率（文） 63 大学



2. 学部卒業生数（日）55 大学と（文）63 大学を合体



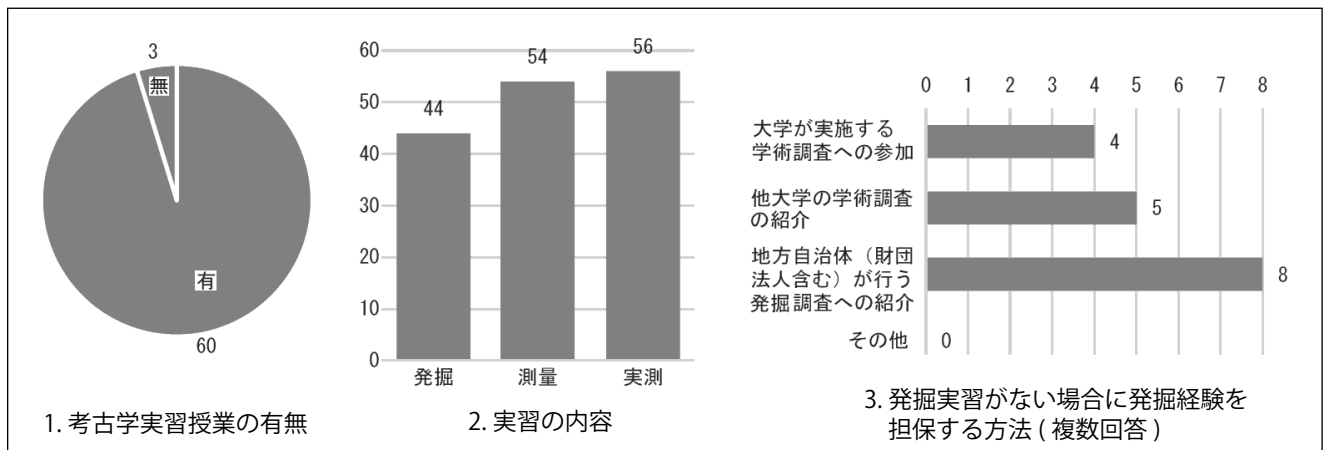
3. 学部卒業生数と男女の別（日） 44 大学



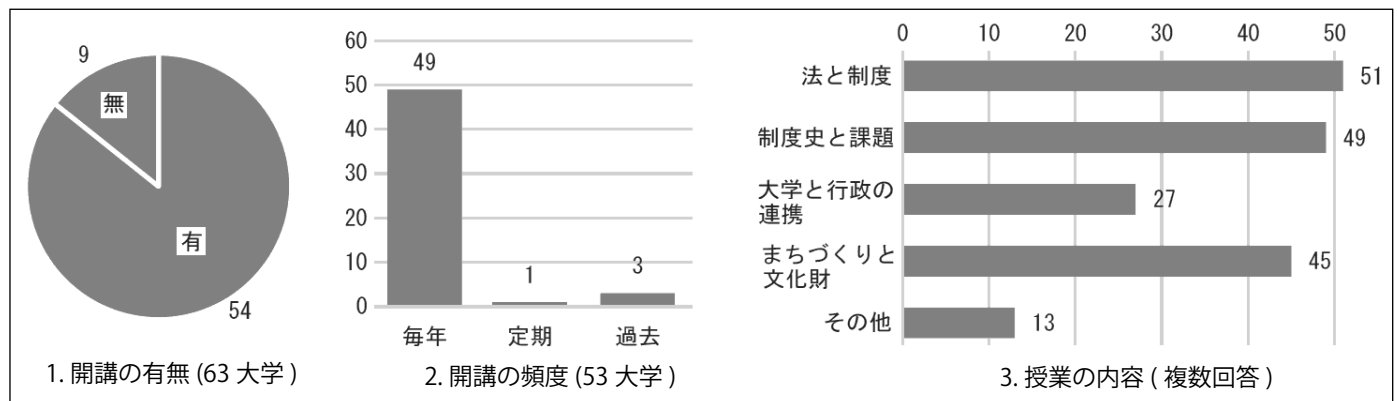
4. 大学院修了生数専門職就職率（文） 63 大学

④学生数の推移

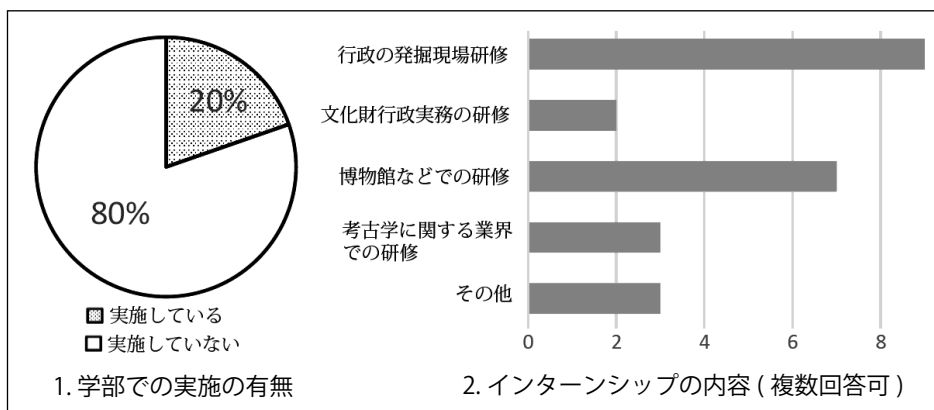
※文化庁集計は平成 1～5 年、27～29 年は文化庁の調査データ、平成 10～26 年は日本考古学協会の調査データによるもので、それぞれ回答大学数が異なるため、総数の取扱いは注意が必要。



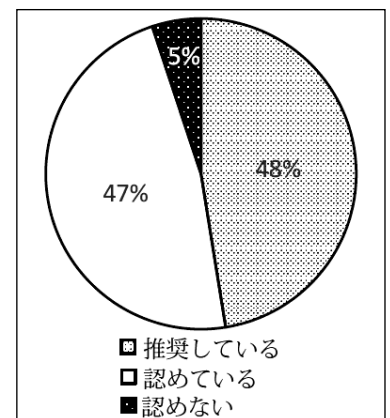
⑤学生の発掘調査経験について (63 大学) (文)



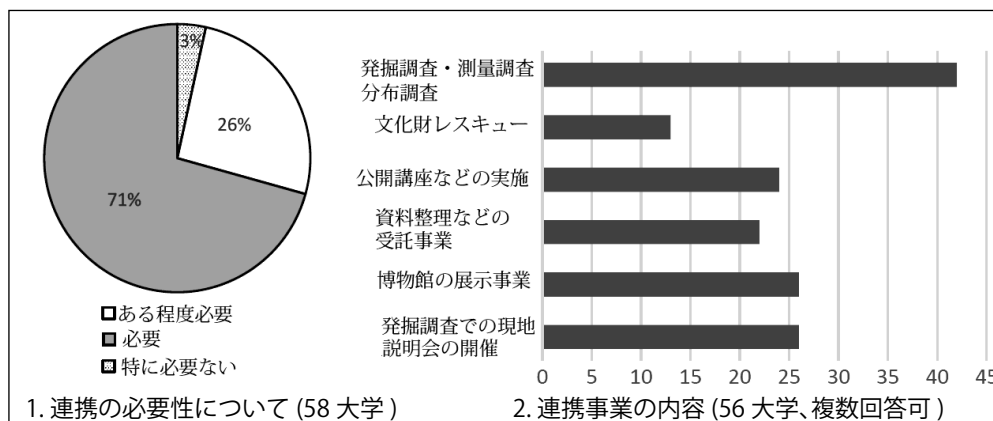
⑥文化財保護行政に関する授業について (文)



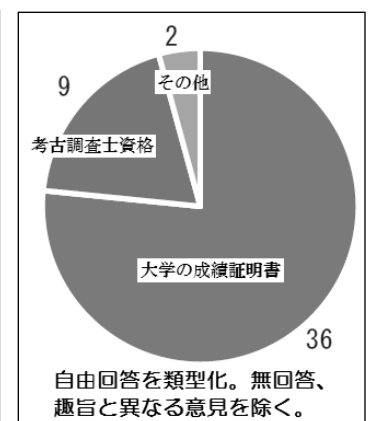
⑦インターンシップ授業の実施状況 (61 大学) (日)



⑧行政の記録保存調査への参加 (59 大学) (日)



⑨地域の行政機関との連携について (日)



⑩考古学専攻履修の認証方法 (文)

考古学専修(学部)

開講時期	曜日 時限	時間割 コード	授業科目名	講義題目	単位	対象 年次
通年	水5	002609	考古資料論演習	考古学の基本技術	4	3,4年
夏	集中	002610	日本考古学演習	土器瓦痕学総論—縄文時代の栽培植物と家屋害虫—	2	2,3,4年
春～夏	月3	002602	考古学講義	考古学の基礎的方法	2	2,3,4年
春～夏	水2	002608	比較考古学演習	考古学文献演習	2	2,3,4年
春～夏	水3	002606	考古資料論講義	日本古代における窯業生産	2	2,3,4年
春～夏	木2	002604	考古学演習	考古学卒業論文演習	2	4年
春～夏	不定期	002615	考古学演習	考古資料分析実践演習1	2	2,3,4年
秋～冬	月3	002611	日本考古学演習	日本における古代国家の形成過程	2	2,3,4年
秋～冬	水3	002605	日本考古学講義	歴史考古学の諸問題	2	2,3,4年
秋～冬	木1	002607	比較考古学演習	考古学洋書講読	2	2,3,4年
秋～冬	木2	002603	考古学演習	考古学論文演習	2	3,4年
秋～冬	不定期	002616	考古学演習	考古資料分析実践演習2	2	2,3,4年

考古学専門分野(大学院前期課程)

開講時期	曜日 時限	時間割 コード	授業科目名	講義題目	単位	対象 年次
夏	集中	201901	日本考古学演習	土器瓦痕学総論—縄文時代の栽培植物と家屋害虫—	2	1,2年
春～夏	月4	201902	考古学修士論文作成演習	考古学修士論文指導1	2	1,2年
春～夏	水3	201905	考古資料論講義	日本古代における窯業生産	2	1,2年
春～夏	水6	201906	考古学演習	プロジェクト研究実践演習	2	1,2年
春～夏	不定期	201907	考古資料論演習	フィールド調査実践演習1	2	1,2年
秋～冬	月3	201909	日本考古学演習	日本における古代国家の形成過程	2	1,2年
秋～冬	月4	201903	考古学修士論文作成演習	考古学修士論文指導2	2	1,2年
秋～冬	水3	201904	日本考古学講義	歴史考古学の諸問題	2	1,2年
秋～冬	不定期	201908	考古資料論演習	フィールド調査実践演習2	2	1,2年

(2019年度)

考古学専修(学部)

開講時期	曜日 時限	時間割 コード	授業科目名	講義題目	単位	対象 年次
通年	水5	002609	考古資料論演習	考古学の基本技術	4	3,4年
夏	集中	002612	比較考古学講義	古墳時代の日朝関係史—海の向こうから見た倭国—	2	2,3,4年
春～夏	月2	002607	比較考古学演習	考古学洋書講読	2	2,3,4年
春～夏	水3	002606	考古資料論講義	日本古代における窯業生産	2	2,3,4年
春～夏	水4	002602	考古学講義	考古学の基礎的方法	2	2,3,4年
春～夏	木2	002604	考古学演習	考古学卒業論文演習	2	4年
春～夏	不定期	002615	考古学演習	考古資料分析実践演習1	2	2,3,4年
秋～冬	月2	002601	日本考古学講義	埋蔵文化財の保護と考古学研究	2	2,3,4年
秋～冬	水2	002608	比較考古学演習	考古学文献演習	2	2,3,4年
秋～冬	水3	002605	日本考古学講義	歴史考古学の諸問題	2	2,3,4年
秋～冬	木2	002603	考古学演習	考古学論文演習	2	3,4年
秋～冬	不定期	002616	考古学演習	考古資料分析実践演習2	2	2,3,4年

考古学専門分野(大学院前期課程)

開講時期	曜日 時限	時間割 コード	授業科目名	講義題目	単位	対象 年次
夏	集中	201912	比較考古学講義	古墳時代の日朝関係史—海の向こうから見た倭国—	2	1,2年
春～夏	月4	201902	考古学修士論文作成演習	考古学修士論文指導1	2	1,2年
春～夏	水3	201905	考古資料論講義	日本古代における窯業生産	2	1,2年
春～夏	水6	201906	考古学演習	プロジェクト研究実践演習	2	1,2年
春～夏	不定期	201907	考古資料論演習	フィールド調査実践演習1	2	1,2年
秋～冬	月2	201900	日本考古学講義	埋蔵文化財の保護と考古学研究	2	1,2年
秋～冬	月4	201903	考古学修士論文作成演習	考古学修士論文指導2	2	1,2年
秋～冬	水3	201904	日本考古学講義	歴史考古学の諸問題	2	1,2年
秋～冬	不定期	201908	考古資料論演習	フィールド調査実践演習2	2	1,2年

(2020年度)

⑪大阪大学における学部、大学院前期の開講授業 (2019 年度と 2020 年度)

※先史講義・中近世講義・外国講義・文化財科学講義・埋蔵文化財行政講義は3年に1回

実習
日本講義 (先史)
概説系
日本 / 外国
日本講義 (古代)
卒論研究
実習
日本講義 (原史)
日本講義 (古代)
外国
卒論研究 (含外国)
実習

日本講義 (先史)
修論研究
日本講義 (古代)
実習系
実習
日本講義 (原史)
修論研究 (含外国)
日本講義 (古代)
実習

実習
外国講義
外国
日本講義 (古代)
概説系
卒論研究 (含外国)
実習
埋蔵文化財行政
日本 / 外国
日本講義 (古代)
卒論研究 (含外国)
実習

外国講義
修論研究 (含外国)
日本講義 (古代)
実習系
実習
埋蔵文化財行政
修論研究 (含外国)
日本講義 (古代)
実習

考古調査士の養成に必要な科目群を、体系的かつ網羅的に履修するために、以下の第1科目群から第7科目群を標準科目群として設置する。これは、社会人課程、学生課程の両課程に共通する。

第1科目群 考古学の概説

特定の時代、地域に限定せず、幅広く世界の地域や時代にわたって、原始文化や古代文明などについて概説する分野。時代、あるいは地域を限ってテーマを固定する場合でも、幅広いジャンルにまたがって全体的テーマを設定する場合は、概説的な扱いとする。

第2科目群 考古学の基礎的方法論を扱う科目群

考古学の研究、調査分野では地域や時代を越えた共通の方法論がある。例えば、層位学原理に基づくものや、年代学の基礎たる型式編年学など、基礎的分野を総合的に扱い、考古学一般の基礎的原理を教える分野。

第3科目群 考古学の個別分野を特論的に扱う科目群

日本の先史考古学、あるいは歴史考古学、古代エジプト文明やマヤ文明の研究など、世界の一地域に特化した研究、あるいは自然環境、自然遺物などの分野、特定の学術的課題に焦点を絞り、特論的に扱う分野。

第4科目群 考古学調査の技術的実習分野

考古学の野外調査に必要な基本的技術に関する科目群。各種の測量技術や機器の操作法をはじめ、発掘調査に必要な知識や技術、また遺物などを実測などにより資料化し、適切な整理作業を通じて調査成果を発掘報告書にまとめあげる技術を習得する分野。また実験考古学的方法を用い、古代の技術や手法を復元するための実見実習的科目を含む。

第5科目群 埋蔵文化財を扱う科目群

埋蔵文化財の保存と活用に関する科目群で、埋蔵文化財調査やその成果の扱いに関わる分野。文化財保護法などの諸法規や理念と、実際の運用などについて学ぶ科目群。

第6科目群 文化財科学を扱う科目群

埋蔵文化財の調査と研究、活用するにあたって必要となる自然科学を学ぶ分野。埋蔵文化財の産地推定、年代測定、三次元計測といった理化学的分析、地中探査、古環境の復元、GISといった情報システム、あるいは保存科学や修復技術等に関わる科目群。

第7科目群 その他の関連科目群

考古学と間接的に関係し、考古学を側面から支援する学問領域、学際的分野からなる。古代史などの概論、文化人類学や形質人類学、日本民俗学、宗教学などの分野。

発見から83年目、初の発掘調査！



平成29年
10月15日(日)
入場無料

定員180名 ※要申込み(先着順)
会場：宝塚市立東公民館
講演時間：午後1時30分～3時30分
(午後1時開場)
※手話通訳・要約筆記あり
■申し込み・問い合わせ■
期間：平成29年9月1日(金)～10月13日(金)
平日 午前9時～午後5時
電話またはFAXでお申込みください。
受付：宝塚市教育委員会 社会教育課
TEL: 0797-77-2029 FAX: 0797-71-1891

大阪大学 考古学研究室

ばんらいさん
万籟山古墳

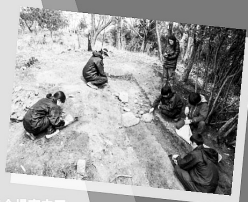
発掘調査

成果報告講演会

～講演内容～

講演1 午後1時35分～2時15分
「万籟山古墳の発掘調査成果」
中久保 辰夫 助教 (大阪大学大学院)

講演2 午後2時15分～3時30分
「長尾山丘陵の古墳群と邪馬台国からの風」
福永 伸哉 教授 (大阪大学大学院)



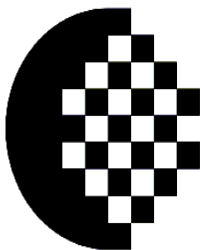
■会場案内■
阪急山本駅下車 南口より徒歩5分
※駐車場台数に限りがありますので、なるべく公共交通機関をご利用ください。
住所：宝塚市山本南2丁目5番2号
TEL：0797-89-1567(当日問い合わせ先)

主催：宝塚市教育委員会／大阪大学考古学研究室

⑫考古調査士資格に要する履修科目群(認定機構 HP)

⑬大学の学術調査と文化財保護行政の連携の一例

令和2年度 大学における 文化芸術推進事業 応募要領



文化庁

令和元年11月
参事官(芸術文化担当)付

1. 募集概要

1. 事業の目的

大学の有する教員、教育研究機能、施設・資料等の資源を積極的に活用したアートマネジメント(文化芸術経営)※人材の養成プログラムの開発・実施を補助し、開発されたプログラムを広く他大学等に周知・普及させることで、我が国の文化芸術の振興を図ることを目的とします。

※ アートマネジメント(文化芸術経営)とは、劇場、音楽堂等の文化施設、美術館・博物館、文化芸術団体等において、芸術家の創造、文化芸術を享受する鑑賞者を中心とする地域社会、産業界及びそれらを支えるリソースとの連携・接続を図ることにより、文化芸術の作り手と受け手をつなぐ役割のことを指します。(いわゆるファシリテータの役割も含みます。)

また、アートマネジメントを担う人材に求められる能力としては、文化芸術に関する幅広い知識を持ち、芸術の受け手のニーズをくみ上げ、魅力的な公演・展示を企画する能力、文化芸術の価値を地域や行政にわかりやすく説明する能力、公演・展示の実施に必要な資金獲得、営業・渉外交渉等の業務を行う能力などが挙げられます。

2. 補助金交付の対象となる事業の実施期間

令和2年4月1日から令和3年3月31日までの間

※ ただし、令和2年度予算が令和2年4月1日までに成立しない場合、事業の開始は令和2年度予算成立以降となります。

3. 補助の対象となる事業者

国公立大学(学校教育法第108条第2項の大学を含む)ただし、令和元年度で本事業を3年継続して同一趣旨・目的・内容の事業を採択された大学については、同一の事業を令和2年度の本事業に申請することはできません。趣旨・目的・内容が異なる新たな事業の場合は申請することは可能です。

※ 事業の実施主体は大学です。必要に応じ、芸術文化団体や劇場・音楽堂等の文化施設等との連携も可能です。

⑭芸術関係の文化庁人材養成事業



Archaeology is a great subject to take at university. Why then are fewer and fewer students applying to study it?
Photograph: Graham Turner/The Guardian

British archaeology is in a fight for survival

Mary Shepperson

The first University Archaeology Day marks a point of crisis in British archaeology. As student applications fall, threatening university departments with cuts, commercial demand for archaeologists is soaring, leaving a looming skills shortage

Tuesday 20 June 2017 10.32 BST

On 22 June, the first ever University Archaeology Day will be hosted by University College London. The event aims to promote archaeology as a university subject and as a career to prospective students, bringing together archaeology departments from around the country and various organisations who employ archaeology graduates. The intention is to paint an inspiring picture of archaeology as an exciting field of study leading to a hearty spread of career opportunities, but University Archaeology Day is also a response to a growing crisis in UK archaeology, both for university departments and for the commercial sector. This crisis is likely to have repercussions well beyond the world of academia.

Archaeology is a great subject to take at university; it brings together a mix of humanities and sciences, and combines social theory, critical thinking and hard practical skills. Adventure abounds, both intellectual and actual. Why then are fewer and fewer students applying to study it? This is the question plaguing beleaguered archaeology departments across the UK which are seeing student numbers drop year on year.

The problem boils down to a combination of perceptions and financial factors. The drop in student numbers began after the 2008 financial crisis but has been exacerbated by the hike in tuition fees and the withdrawal of student loans for second degrees. Unlike earlier generations who saw university as more of a chance to experience and explore, students now increasingly see university as a financial investment which needs a decent prospect of financial reward to make sense. Subjects like archaeology, which don't obviously lead to well paid careers, have suffered the consequences of this more hard-nosed attitude towards education. The scrapping of A-level archaeology last year is both symptom and cause of the declining profile of the subject among students.

Archaeology is more sensitive to falling student numbers than most subjects. The need for laboratory work and the requirement for a range of practical training makes archaeology an expensive subject to teach. However, archaeology is not classed as a STEM (<https://www.theguardian.com/science/2017/jun/20/trouble-brewing-british-archaeology>)

⑮イギリスでの考古学専攻生の減少と大学側の取り組み (Guardian 紙報道 2017)

University Archaeology UK

[Home](#)[UAUK Members](#)[Studying Archaeology](#)[Employability](#)[Links](#)[Contact us](#)

A total of 39 universities and colleges are members of *University Archaeology UK* representing the majority of institutions offering single or joint honours courses in archaeology in the UK

- [University of Aberdeen](#)
- [Bangor University](#)
- [Queen's University Belfast](#)
- [Birkbeck, University of London](#)
- [University of Birmingham](#)
- [Bournemouth University](#)
- [University of Bradford](#)
- [University of Brighton](#)
- [University of Bristol](#)
- [University of Cambridge](#)
- [Canterbury Christ Church University](#)
- [Cardiff University](#)
- [University of Chester](#)
- [Durham University](#)
- [University of Edinburgh](#)
- [University of Exeter](#)
- [University of Glasgow](#)
- [University of Hull](#)
- [University of Kent](#)
- [University of Central Lancashire](#)
- [University of Leicester](#)

- [University of Liverpool](#)
- [University College London](#)
- [University of Manchester](#)
- [Newcastle University](#)
- [University of Nottingham](#)
- [University of the Highlands & Islands, Orkney College](#)
- [University of Oxford](#)
- [University of Reading](#)
- [Royal Holloway, University of London](#)
- [University of Salford](#)
- [University of Sheffield](#)
- [University of Southampton](#)
- [Truro and Penwith College](#)
- [University of Wales Trinity St David](#)
- [University of Winchester](#)
- [University of Worcester](#)
- [University of York](#)

These institutions have thriving archaeology departments or sections. To find out more, click on any of the names from the list above. You will find out information about the courses available, the staff group and their backgrounds and interests, the research projects that the staff are involved in and the latest news highlighting the achievements of staff and students.

University Archaeology UK

[Home](#)[UAUK Members](#)[Studying Archaeology](#)[Employability](#)[Links](#)[Contact us](#)

University Archaeology UK represents the departments of Archaeology in UK universities

Archaeology provides a unique perspective on the human past, on what it is to be human. As the only subject that deals with the entire human past in all its temporal and spatial dimensions, it is fundamental to our understanding of how we evolved, how our societies came into being, and how they changed over time.

University Archaeology Day

The 2019 University Archaeology Day will be held on Saturday 12 October at the British Museum.

The event is designed for prospective students, teachers and parents to learn about the many degree programmes on offer across the UK, to discover the huge range of career opportunities that an archaeology degree can lead to, and to hear about some of the latest archaeological research.

Most of the top archaeology departments will be represented in our display area, along with a range of organisations that promote the subject and employ archaeology graduates. There will also be a full programme of talks and activities covering application tips, careers advice, and a wide range of archaeological topics including some of the latest finds and cutting-edge research.

Find out more via the [University Archaeology day website](#) and [Facebook page](#) and register your interest [here](#).



Photographer Alastair Fyfe, © The British Academy

第4回

文化財を守り、活かし、伝える仕事とは

— 近畿地区文化財専門職説明会 2020 —

資料集

プログラム（目次）

開会	（13:00～13:10）：開会・開催趣旨	水ノ江和同（同志社大学）	・・・1
発表1	（13:10～13:40）：「考古学の学びと埋蔵文化財行政」	藤井幸司（文化庁文化財第二課埋蔵文化財部門）	・・・2
発表2	（13:40～14:10）：「考古学とひとをつなぐ仕事」	新田宏子（兵庫立考古博物館）	・・・5
発表3	（14:10～14:40）：「小さな市役所の文化財担当のしごと」	松崎健太（舞鶴市教育委員会）	・・・7
発表4	（14:40～15:10）：「古市古墳群の保護と活用」	泉 眞奈（藤井寺市教育委員会）	・・・9
発表5	（15:10～15:20）：「花園大学構内第十次調査の報告と感想」	西脇菜々（花園大学文学部日本史学科）	・・・11
発表6	（15:20～15:30）：「富雄丸山古墳の発掘調査」	古谷真人（奈良大学）・村瀬 陸（奈良市教育委員会）	・・・13
休憩	（15:30～15:40）		
討論	（15:40～17:10）：「パネル・ディスカッションー近畿地区の遺跡・文化財保護最前線を知るー」	【パネリスト】近畿地区2府5県担当者・発表者	
閉会	（17:10）		
情報交換会	（17:30～19:00）	同志社大学 良心館ラウンジ（発表者・パネリスト・参加者の懇談）	

巻末資料

1：発表者紹介・メッセージ	・・・15
2：近畿地区2府5県の紹介・情報とパネリストからのメッセージ	・・・15

2020年1月26日（日）同志社大学 良心館 104 教室

主催：近畿地区考古学大学連絡協議会（全26大学）、近畿地区2府5県（京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県・滋賀県・三重県）教育委員会

後援：文化庁

協力：同志社大学

⑰近畿地区の大学協同の取り組み (<https://www1.doshisha.ac.jp/~kmizunoe/posts/news5.html>)

水中遺跡のてびきの作成について

藤井 幸司（文化庁）

1. 水中遺跡の調査研究

（1）目的

- ・水中遺跡から得られる情報は、陸上の歴史事象を中心に構築されてきた我が国の歴史と文化をよりよく理解するため上で極めて重要。
- ・我が国における水中遺跡の保護の必要性、現状と課題、在り方等について基本的な考え方を示すことを目的として、検討に着手。

（2）平成29年報告について

第1章 水中遺跡とは

1. 定義：「海域や湖沼等において常時もしくは満潮時に水面下にある遺跡」（『平成12年報告』）
※平成29年報告も定義を踏襲したが、陸上の埋蔵文化財として把握しているダム、ため池、河川等の内水面下にあるものは扱わなかった（定義から外していない）。
2. 水中遺跡の種類と特性
3. 水中遺跡保護に関する現状と諸課題及び報告の目的

第2章 諸外国における水中遺跡保護の現状

1. 諸外国における水中遺跡保護の経過
2. 諸外国における水中遺跡保護の成果と課題
3. 我が国において検討を要する事項

第3章 水中遺跡保護の現状と課題

1. 水中遺跡保護に関するこれまでの主な取組
2. 水中遺跡保護に関する行政的な課題

第4章 水中遺跡保護の在り方

1. 陸上の埋蔵文化財行政との共通点と相違点
2. 水中遺跡保護の在り方
3. 水中遺跡保護の体制

2. 「てびき」の作成事業

（1）「てびき」のねらい

- 地方公共団体による水中遺跡保護の推進を目的としたマニュアルの作成
- 「てびき」を作成することにより、以下の2点を推進
 - ①水中遺跡や水際の遺跡を含めたより豊かな地域史の構築。→活用への新たな視点
 - ②洋上風力発電の建設等、水中遺跡の保護に影響を及ぼす可能性がある事業への対応
→水中の埋蔵文化財の保護

（2）作成のポイント

- 地方公共団体の埋蔵文化財専門職員が抱えている懸念事項（誰が保護の主体となるのか、適用される法令は何か、潜水調査は必須か、等）の解消を図ること

○遺跡の把握から保存・活用に至るまでの過程を実例を取りあげて解説

○水中遺跡保護により得られる効果を説明

※ 約150～200頁（フルカラー）で、読みやすく、分かりやすい「てびき」とする方針

（３）検討体制

○「てびき」のために必要な技術等に関する情報収集及び検証等を目的とした調査研究事業

○事業の一部は国立文化財機構に委託して実施

○調査検討委員会

赤司善彦（兼協力者）、池田榮史、今津節夫、木村 淳（兼協力者）、坂井秀弥、佐藤 信、
禰亘田佳男（兼協力者）

○協力者会議（作業部会）

新里亮人、鈴木一有、吉田東明、奈良文化財研究所研究員（探査、保存科学等）

（４）検討の経過と今後の予定

○平成30年度～令和元年度：てびきの記載項目検討を中心に

・検討委員会：年2回

・協力者会議：年4回

・研究集会：年1回（アンケートの実施・埋蔵文化財ニュース）

○令和2年度：てびきの内容調整・執筆

・検討委員会：6月・3月（予定）

・協力者会議：9月（予定）・11月（予定）・2月（予定）

・執筆者・編集会議：8月・10月（予定）・12月（予定）

（５）今後の予定

○令和3年度：てびきの編集・刊行

○令和4年度：てびきの周知

（５）「てびき」の章立て案

第1章 概説

てびきのねらい・水中遺跡保護の意義・日本における水中遺跡の保護の現状と課題

第2章 埋蔵文化財の保護と水中遺跡

水中遺跡の定義と対象範囲、保護の制度、水中遺跡に特有の留意事項

第3章 水中遺跡の調査方法

調査の流れ、所在調査、探査、発掘調査〔調査の種類、潜水を伴う発掘調査、潜水を伴わない発掘調査（干潮時の調査、陸地化する調査）〕、調査組織の在り方

第4章 水中遺跡と出土遺物の保存と管理

水中における遺跡の保存、引揚げ後の出土遺物の保存

第5章 水中遺跡の活用

活用の在り方について、水中遺跡の活用方法、日本の活用事例、海外の活用事例

事例集

時代別・種別別・手法別の調査事例、博物館、教育研究機関、索引

※「てびき」章立て案は検討中のため、今後、変更する可能性がある。

発掘調査費用の積算等に関する実態調査結果（速報）

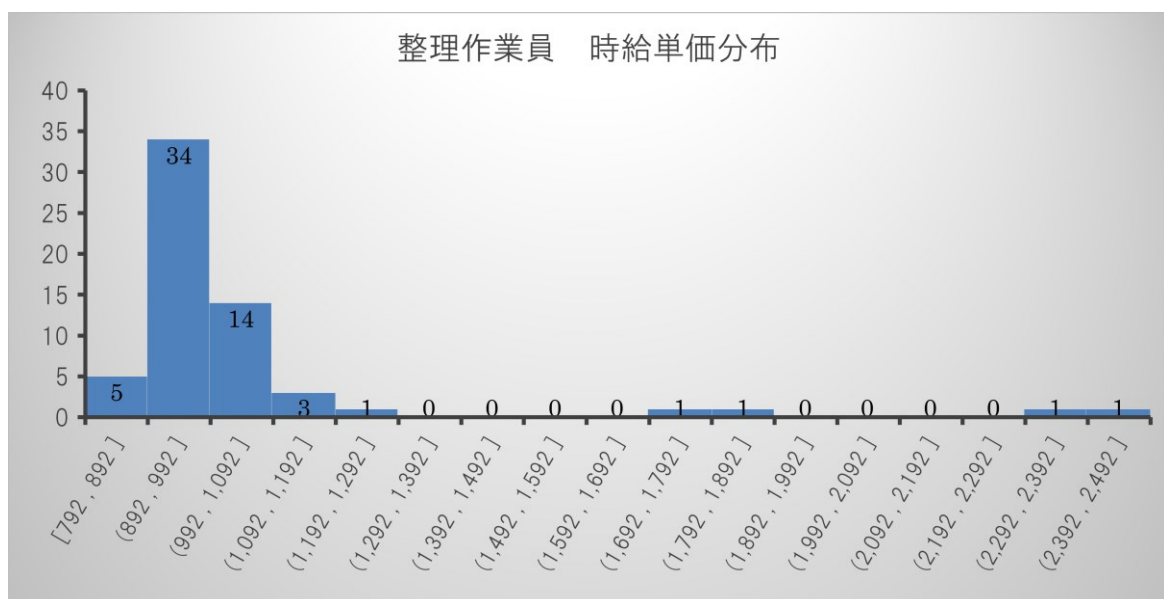
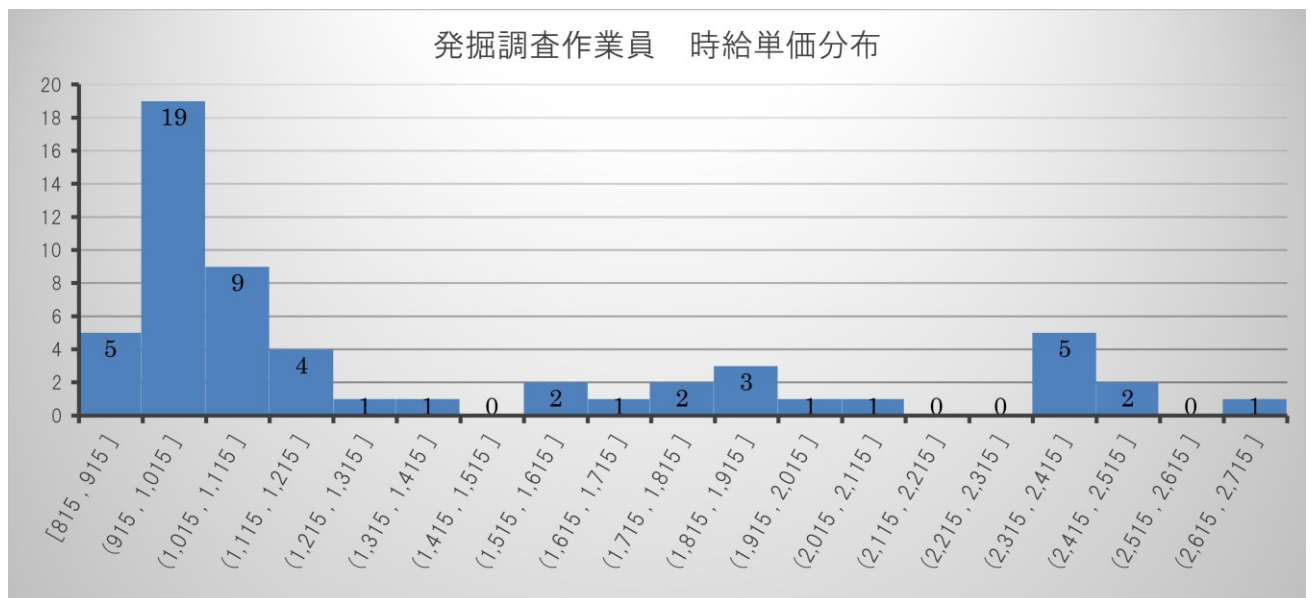
藤井 幸司（文化庁）

○目的 令和元年度実施の国土交通省行政事業レビュー公開プロセスで「発掘調査費用の縮減」が指摘されたことを受けて、その具体的な対応を検討するため

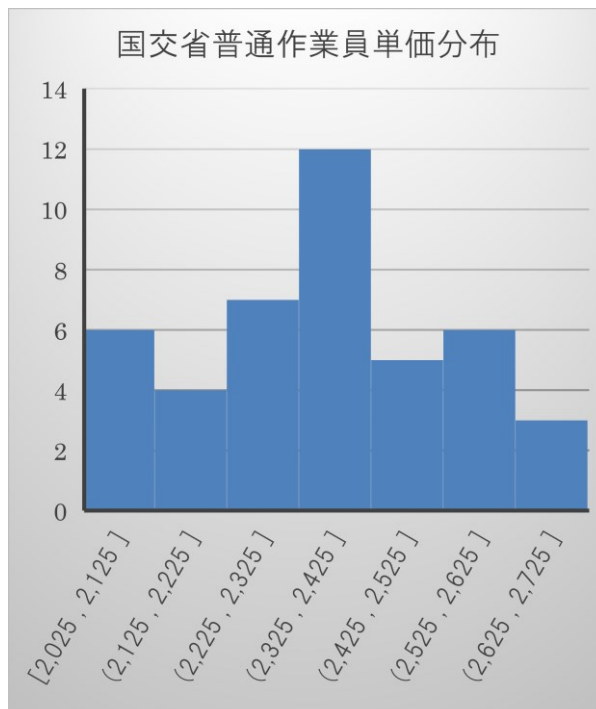
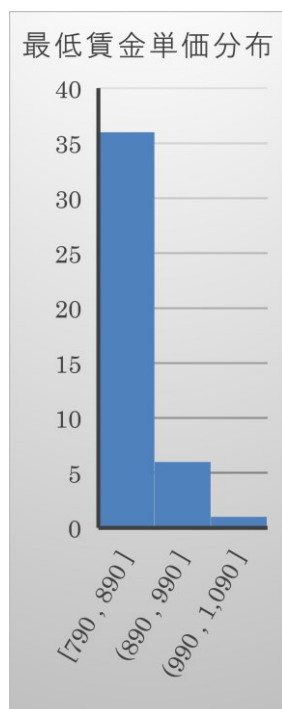
○対象 過去5年間に国土交通省からの発掘調査の受託実績がある又は令和2年度に受託見込みがある地方公共団体及び公益法人等調査組織

○実態調査回答概要

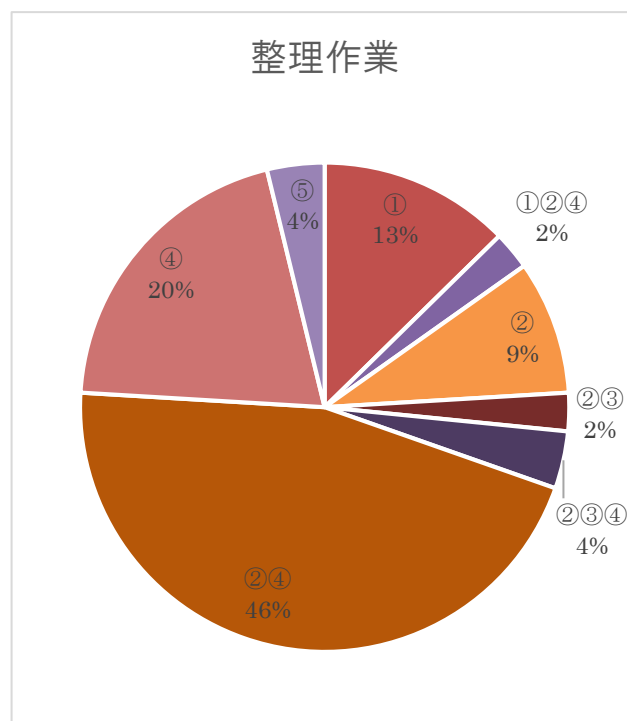
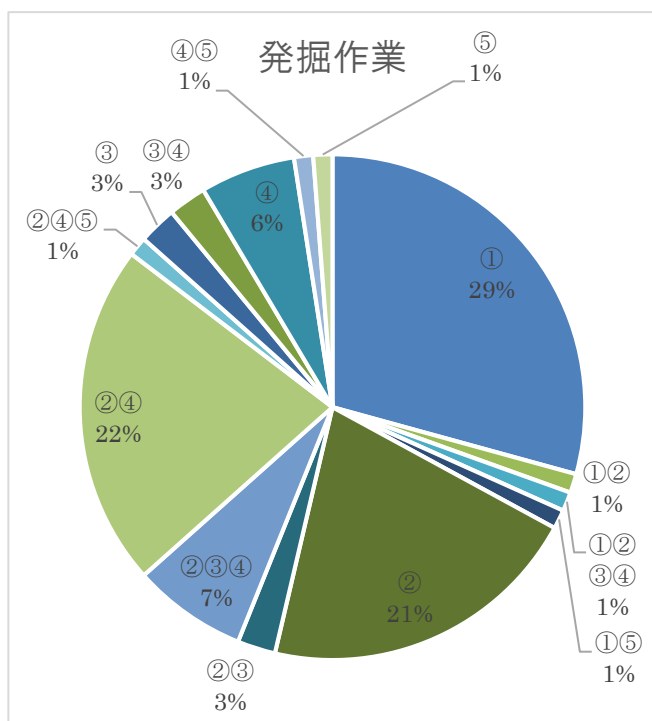
- ・作業員単価について



(参考)

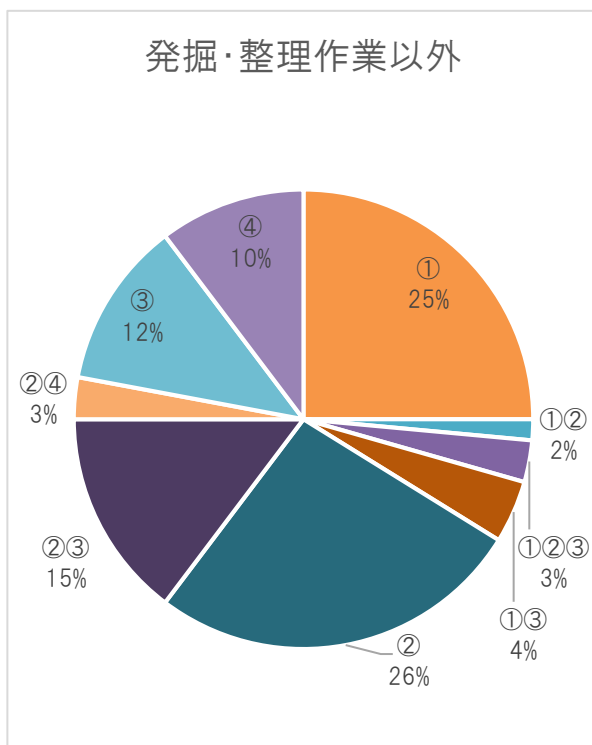
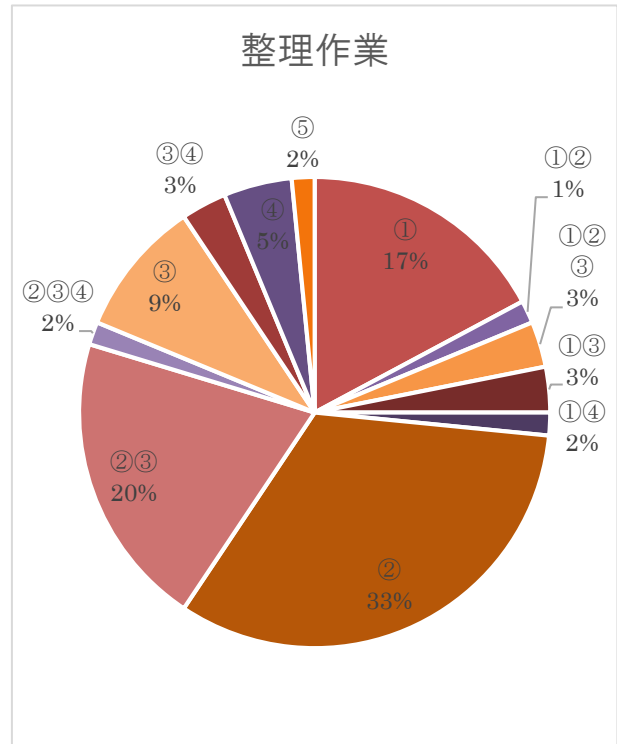
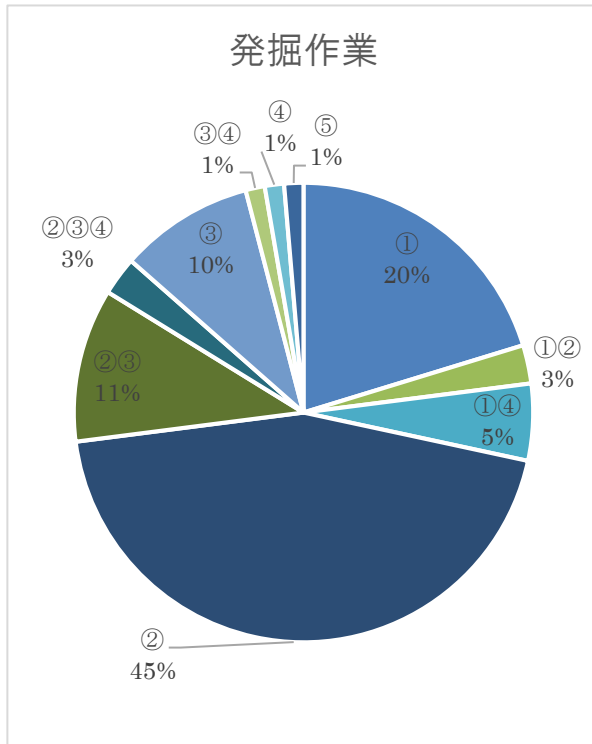


・発掘作業・整理作業の実施方式



- ① 一括して請負又は委託
- ② 作業内容ごとに請負又は委託又は借上
- ③ 作業内容ごとに単価契約
- ④ 作業員を直接雇用
- ⑤ その他

・契約・入札制度



(発掘作業・整理作業)

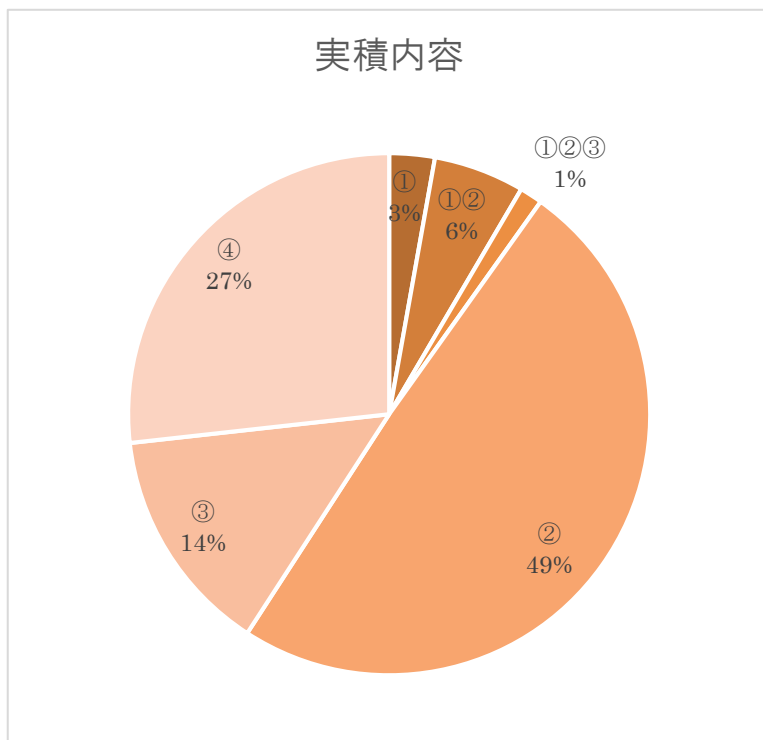
- ① 一般競争入札
- ② 指名競争入札
- ③ 随意契約
- ④ 少額随契
- ⑤ その他

(発掘・整理作業以外)

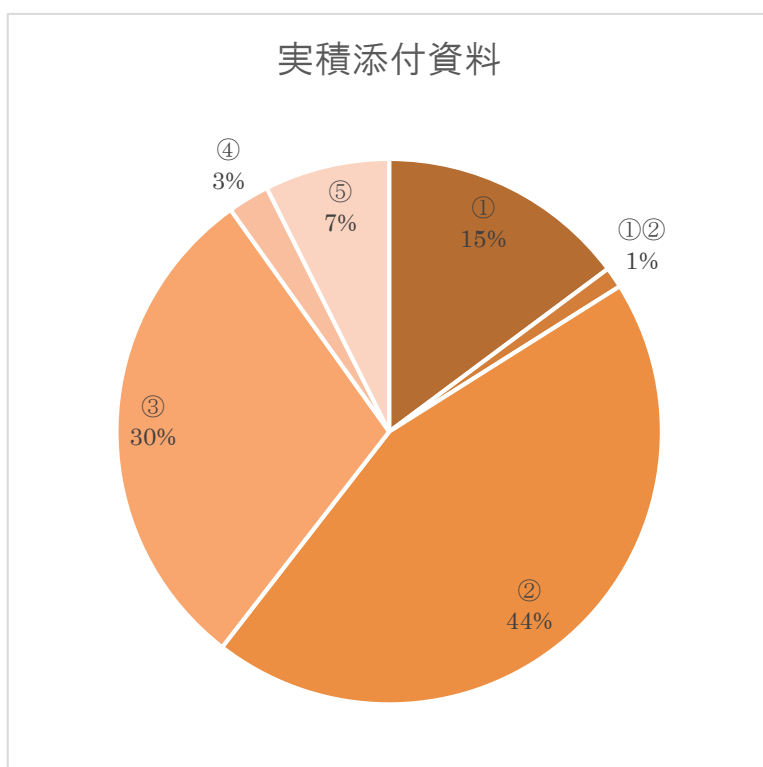
- ① 一般競争入札
- ② 指名競争入札
- ③ 随意契約
- ④ その他

※ 少額随契以外を質問

・発掘調査費用の精算



- ① 作業工程ごとに設計員数と実績員数とを比較可能な状態で提示
- ② 費目ごとに積算金額及び実支出額を比較可能な状態で提示
- ③ 費目ごとに積算金額, (実績員数ではなく調査面積・掘削土量等の) 実績数量による精算設計金額及び実支出額を比較可能な状態で提示
- ④ 費目ごとの該当契約の実支出額のみを提示



- ① 請負業者等が作成した設計数量・員数と実績数量・員数の記載のある工事完成図書又は委託業務成果等をそのまま提出する
- ② 請負業者等が作成した設計数量・員数と実績数量・員数の記載のある工事完成図書又は委託業務成果等の一部を抜粋して又は一部を利用して関係資料を提出する
- ③ 請負業者等が作成した工事完成図書又は委託業務成果等は提出しない
- ④ 工事完成図書又は委託業務成果等がない
- ⑤ その他

※今回のグラフは速報値のため、最終的な集計値は異なる可能性がある。

埋蔵文化財の活用に関する取組事例の紹介

埋蔵文化財担当職員等講習会においては、各地方公共団体等が行っている埋蔵文化財の活用事例等について御報告をいただいているが、限られた講習会の時間内での口頭報告のため全国に紹介できる事例は限られている。

埋蔵文化財の活用に関する取組が各地で活発に行われている昨今、より多くの地方公共団体等が実施している様々な取組事例を共有することは、埋蔵文化財の活用を推進するためにも有効である。そこで、本講習会で配布する資料において、各地の取組事例を御報告いただく機会を設けることとした。

本年度は53組織からの応募を受け、そのうち13組織の取組事例について紹介することとした。なお、その他応募を受けた組織とその取組事例は54頁より示した。

1. 町民の1割は発掘経験者

青森県南部町

取組名称	戦国大名南部氏の居館を活用した体験学習		
遺跡名称	史跡聖寿寺館跡	取組の対象	町内小学生・教員
実施主体	南部町教育委員会	共催等	町内小学校
取組の目的	本取組は史跡聖寿寺館跡の発掘体験や奥州街道ウォーク、出前授業を通じて歴史を解明する過程を体験してもらうことで、史跡や埋蔵文化財に対する興味関心を喚起し、郷土の歴史を学んでもらうことを目的とする。		
予算措置	なし		
予算額	0千円	実施年度	平成11年度～令和2年度（今後も継続）
取組内容	1 戦国大名南部氏の本拠地 青森県南部町では北東北最大の戦国大名三戸南部氏の居館 聖寿寺館跡の発掘調査を平成5年度から継続して実施している。これまでの発掘調査により、東北最大規模の掘立柱建物跡や東北最古級の桁形虎口が確認され、中国産高級陶磁器や北東北初の手づくね犬形土製品、中世アイヌ文化の骨角製品等が出土している。 2 歴史を解明する過程を体験 次世代へ史跡聖寿寺館跡の価値を伝えるため、町内の各小学校を対象に体験発掘や奥州街道ウォーク、埋蔵文化財に触れ合う出前授業を取り入れた教育プログラムを開催している。 【体験発掘】 体験発掘は平成11年度から継続して開催しており、主に町内小学校に対し年度初めに募集を行い、毎年町内の6学年を主体とする数校が参加する傾向にある。現在では学校の年間計画に組み込んでいる小学校もある。体験発掘を実施する上で重要となるのが事前レクチャーである。発掘調査の目的や内容・方法・意味を事前にレクチャーしておかなければ、調査そのものの意義や重要性が伝わらないため、本取組では事前に城館の歴史的背景や構造を伝え、さらに発掘調査の方法や地層、発掘調査区内の歩き方までをレクチャーした上で、個別指導で移植ごとの持ち方や掘り方など諸注意を伝えている。その後、60分から90分程度の発掘体験となるが、実際に小学生は微細な炭化穀物や陶磁器碎片を見逃さず、出土位置を動かすことなく、発掘担当者に教えてくれる。ただし、陶磁器や鉄製品・石製品などの遺物を発見できるのは児童の3～4割程度であり、全く発見できずに終わる児童の方が多い。しかしそんな中、平成29年度の体験発掘では小学6年生の女子児童が二等辺三角形を呈する化石を発見した。この化石は中近世段階で「天狗の爪石」として珍重された約150万年前に絶滅した巨大ザメ「カルカロドンメガロドン」の歯の化石であることが後に判明し、急遽、小学校図書室で		



写真1 体験発掘風景



写真2 巨大ザメの化石発見記事

記者会見を実施した。体験発掘では最後に出土文化財の帰属とその後の法律的な手続きを解説し、国民共有の財産としての文化財の重要性を伝えている。

【奥州街道ウォーク】 史跡聖寿寺館跡は五街道の一つである奥州街道とその脇街道にあたる鹿角街道が交差する地点で、付近を一級河川馬淵川が流れる水陸両方の交通の要衝に築かれている。周囲には様々な城館や中世からの寺院、枡形状のクランクも複数箇所存在している。これらの周辺施設と聖寿寺館跡の立地の特徴など中世の景観を伝えるためには、奥州街道を歩きながら解説する方法が最も効果的である。奥州街道ウォークでは、城館内部の見学だけではない、中世の町割り・城館施設の痕跡を「城」を攻める視点で歩き、身近な道路や畑、果樹園が実は重要な役割を担っていた場所であったことを伝えている。



写真3 奥州街道で説明を受ける地元小学生

【出前授業】 出前授業では、発掘担当者が実際に出土した遺物を学校に持ち込み、発掘当時のスライドを交えながら、体験発掘や街道ウォークでは伝えることができない、郷土の歴史や聖寿寺館跡の体系的な情報を伝えている。授業では出土資料に直接触れる機会を大切にしている。このような環境で教員よりも児童・生徒の方が郷土の歴史に造詣を得ていた。そのため、教員側からの要請に応じて、小・中学校教員向けの出前授業も開催した。

3 取組の効果

町内小学校からは、体験発掘や街道ウォークに対する継続的なニーズがある状況が続いている。体験発掘はおおむね町内小学6年生の5～6割が参加しており、特に史跡聖寿寺館跡を校区に持つ町立南部中学校は結果的に全校生徒が「発掘経験者」となっている。

このような長年の取り組みと同時に、町歴史講座「南部ふるさと塾」への参加者も増加傾向にある。参加者はここ10年ほどで10倍に増加し、現在では1回あたり200名程度が参加している。さらに、町では平成25年から「南部学」という学問を立ち上げ、継続的に発掘調査成果も含む調査・研究成果を発信している。



写真4 毎回200名程度が参加する町歴史講座

4 取組のアピールポイント

体験発掘開始から20年ほどが経過した現在、町人口約17,500人に対し、これまでに体験発掘に参加した小学生は累計1,800名に上り、町民の約1割に相当する人が「発掘経験者」となった。当町では特別目立つような普及イベントを開催しているわけではないが、この継続的な取組は、埋蔵文化財に対する興味関心の喚起に重要な役割を果たしていると考えられる。実際、15年前に体験発掘に参加し、歴史に興味を持った小学生が、今では当教育委員会史跡対策室で文化財部門を担当している。

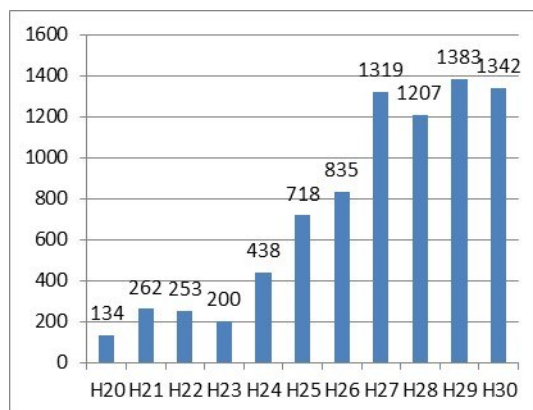


表1 町歴史講座の参加者数
(10年で10倍に増加)

2. 「縄文のころとかたち」が残る文化遺産

秋田県北秋田市教育委員会

取組名称	史跡伊勢堂岱遺跡保存活用事業		
遺跡名称	史跡伊勢堂岱遺跡	取組の対象	市民
実施主体	北秋田市教育委員会	共催等	伊勢堂岱遺跡ワーキンググループ・伊勢堂岱遺跡ジュニアボランティアガイド・秋田県
取組の目的	本事業は縄文時代の遺跡である伊勢堂岱遺跡の保存・調査研究・活用を通して、地域の文化遺産として広く再認識してもらうことを目的としている。		
予算措置	埋蔵文化財公開活用事業（平成30年度）、市単費等		
予算額	2,000千円（平成30年度）	実施年度	平成9年度から継続
取組内容	○取組実施に至る背景 【遺跡の発見から保存、整備まで】 史跡伊勢堂岱遺跡は縄文時代後期の環状列石を主体とする遺跡である。平成8年度に秋田県が道路計画を中止し、遺跡を現地保存した。平成9年度から鷹巣町（現北秋田市）が範囲確認調査及び内容確認調査を行い、その成果を基に「縄文のころとかたちが生きる遺跡」を基本理念として平成23年度から整備事業を行い、平成28年4月にはガイダンス施設である伊勢堂岱縄文館が開館した。施設は展示だけでなく、遺跡の管理やボランティアガイドの活動支援の拠点として機能しており、入館者数は年間約1万人を数える。 ○取組の内容 活用事業は、遺跡ボランティアである伊勢堂岱遺跡ワーキンググループを中心に行い、様々な市民団体とともに活動している。 【体験学習】 遺跡と縄文館の間を流れる湯車川では秋になるとサケの遡上を観察できるが、一時期下流での工事の影響か、サケの個体数が激減した。縄文人も利用したサケが遺跡のそばに遡上するのは珍しいことから、整備検討委員会から稚魚放流の提案があり、「カムバック縄文サーモン」事業と命名し、平成23年度からを毎年継続している。現在では遡上を楽しみに訪れる来訪者も多い。 秋には遺跡の価値を後世に伝えることを目的として、毎年「北秋田市縄文まつり」を行っている。内容は縄文体験青空教室と縄文音楽祭である。体験教室は土器・土偶づくり、縄文鍋料理体験などを行っている。本史跡でないと体験できない独自のメニューづくりを市民の参画のもと、つくり上げてきた。また、音楽祭はかつて縄文人が環状列石に集まって祖先崇拝を行ったように、北秋田市民もイベントステージに集まり、遺跡に思いをはせた独自の歌や踊りを披露する。このために平成8年度に遺跡保存の際に、工事が中止になった道路橋脚を生かしたステージを整備し、利用している。		



写真1 北秋田市縄文まつり

【教育普及活動】 平成２７年度に「伊勢堂岱遺跡ジュニアボランティアガイド」を結成した。小学校４年生から高校３年生を対象とし毎年４０名以上の登録があり、５月の大型連休と８月の夏休み期間を利用して活動している。活動の報告等を行うシンポジウムも毎年実施している。

平成３０年度には、「縄文子どもシンポジウム」を開催した。函館市・八戸市・一戸町で遺跡に関わる子どもに、研究や活用・遺跡の将来について、発表した。

平成３１年度からは、ガイドの外国語サポート事業を秋田県と共催で実施している。中学生及び高校生を対象として、遺跡や縄文館展示を英語でガイドできるように養成する。県文化財部局以外の様々な部局との連携で実現できた事業である。

【調査研究の普及】 冬季は縄文館を会場として、「縄文館講座」を行っている。毎回テーマを設定した上、考古学だけでなく、保存科学・博物館学・美術など、様々な分野の専門家を招いて、講座を実施している。毎回座席が満員になるほどの盛況である。

○取組の効果

平成９年に遺跡が現地保存になり、市民に文化財への理解を広げるために、活用を重視した時期もあったが、現在では学術研究または活用だけに偏らない、バランスのとれた取組を行うように配慮した結果、参加者の増加につながった。遺跡に訪れた市民の割合は、平成２６年度には２７．８％程度だったが、上昇傾向にある。令和２年度まで５０％を目標に取り組んでいる。

○取組のアピールポイント

- ・近年縄文まつりなどの体験イベントは、全国各地でみられるようになった。そこで市民から「どこの遺跡でも行っている体験ではなく、ここでしかできないメニューづくりをしたい」という提案があり、板状土偶レブリカづくりなどのような遺跡の内容に関連した体験メニューづくりを行うように心がけている。
- ・子どものボランティアガイドや、地域子ども達が頻繁にイベントに参加するようになったことで、将来、文化財の仕事をしたいと相談されることも増えてきた。我々専門職員は、子どもたちが将来文化財専門職員になりたいと思える姿を積極的にみせることも必要であろう。
- ・道路計画を中止して遺跡を現地保存し、２０年以上の長い期間で市民とともに活用事業を継続した結果、市民にとって遺跡はそれ自体の価値だけでなく、積み重ねてきた活用等の事業を含めて未来に継承しなければならない貴重な文化遺産という意識が広がってきた。埋蔵文化財専門職員は“過去のを扱う”だけでなく、活用を通して遺跡に新しい価値を生み出す可能性もあると感じている。



写真２ 伊勢堂岱遺跡ジュニアボランティアガイドと他遺跡ガイドとの交流（一戸町）



写真３ 伊勢堂岱縄文館講座

3. 地域のつながりで取り組む遺跡活用

栃木県栃木市

取組名称	遺跡の調査・普及啓発活動における地元教育機関等との連携																																						
遺跡名称	市内遺跡	取組の対象	市民一般																																				
実施主体	栃木市教育委員会 國學院大學栃木短期大学、奈良大学	共催等	市内の高等学校・研究団体 など																																				
取組の目的	埋蔵文化財の調査及び情報発信を地元教育機関及び研究団体等と協力し行い、また、市の企画による、遺跡を含めた市の歴史・文化等を学ぶ講座を例年実施することにより、市民の埋蔵文化財に対する意識を啓発し、文化財愛護の精神を高める。																																						
予算措置	①市単費、②予算措置なし、③主催者負担[県補助金含む]																																						
予算額	以下の取組の内容に記載	実施年度	以下の取組の内容に記載																																				
取組内容	○取組実施に至る背景 栃木市は「蔵の街」として知られるが、旧石器時代以来の重要遺跡も複数所在しており、これらの歴史的価値の解明及び活用は課題である。しかし、調査においては人員の確保や多額の費用といった課題が生じるため、地元教育機関等との連携体制が非常に重要である。また、地域社会における遺跡保護の意識を高めるため、市民向け講座や情報発信ツールを用いた周知活動を行い、市民の文化財愛護の精神を養う必要がある。 ○取組の内容 ①とちぎ文化講座 【事業内容】市の歴史や文化を分かりやすく紹介し、多くの市民にその魅力を知ってもらう機会として、歴史、美術、考古、文学等に関わる様々なテーマによる「とちぎ文化講座」を開催している。 ・講義（埋蔵文化財関連講座のみ抜粋）  写真1 講義  写真2 皆川城址現地見学 <table border="1" style="width: 100%;"> <thead> <tr> <th>講座名</th><th>実施日</th><th>参加者数（人）</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>原始・古代の栃木市</td><td>平成26年7月30日（水）</td><td>51</td></tr> <tr> <td>古代～中世の栃木市</td><td>平成26年8月6日（水）</td><td>49</td></tr> <tr> <td>国・県指定文化財を知る～栃木をつくった歴史（遺跡）～</td><td>平成28年11月26日（土）</td><td>32</td></tr> <tr> <td>縄文時代の栃木</td><td>平成30年10月23日（火）</td><td>38</td></tr> <tr> <td>とちぎの古墳を学ぶ</td><td>令和元年9月19日（木）</td><td>54</td></tr> </tbody> </table> ・現地見学（埋蔵文化財関連講座のみ抜粋） <table border="1" style="width: 100%;"> <thead> <tr> <th>講座名</th><th>実施日</th><th>参加者数（人）</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>栃木市の遺跡・史跡を巡る</td><td>平成26年8月30日（土）</td><td>42</td></tr> <tr> <td>栃木・都賀・西方地域の地名由来の地を巡る</td><td>平成27年9月5日（土）</td><td>38</td></tr> <tr> <td>栃木市の武将ゆかりの城跡を巡る</td><td>平成27年10月31日（土）</td><td>41</td></tr> <tr> <td>大平・藤岡・岩舟地域の地名由来の地を巡る</td><td>平成27年12月5日（土）</td><td>34</td></tr> <tr> <td>藤岡地域を巡る</td><td>平成29年11月4日（土）</td><td>34</td></tr> </tbody> </table> 【予算額】135千円（令和2年度）			講座名	実施日	参加者数（人）	原始・古代の栃木市	平成26年7月30日（水）	51	古代～中世の栃木市	平成26年8月6日（水）	49	国・県指定文化財を知る～栃木をつくった歴史（遺跡）～	平成28年11月26日（土）	32	縄文時代の栃木	平成30年10月23日（火）	38	とちぎの古墳を学ぶ	令和元年9月19日（木）	54	講座名	実施日	参加者数（人）	栃木市の遺跡・史跡を巡る	平成26年8月30日（土）	42	栃木・都賀・西方地域の地名由来の地を巡る	平成27年9月5日（土）	38	栃木市の武将ゆかりの城跡を巡る	平成27年10月31日（土）	41	大平・藤岡・岩舟地域の地名由来の地を巡る	平成27年12月5日（土）	34	藤岡地域を巡る	平成29年11月4日（土）	34
講座名	実施日	参加者数（人）																																					
原始・古代の栃木市	平成26年7月30日（水）	51																																					
古代～中世の栃木市	平成26年8月6日（水）	49																																					
国・県指定文化財を知る～栃木をつくった歴史（遺跡）～	平成28年11月26日（土）	32																																					
縄文時代の栃木	平成30年10月23日（火）	38																																					
とちぎの古墳を学ぶ	令和元年9月19日（木）	54																																					
講座名	実施日	参加者数（人）																																					
栃木市の遺跡・史跡を巡る	平成26年8月30日（土）	42																																					
栃木・都賀・西方地域の地名由来の地を巡る	平成27年9月5日（土）	38																																					
栃木市の武将ゆかりの城跡を巡る	平成27年10月31日（土）	41																																					
大平・藤岡・岩舟地域の地名由来の地を巡る	平成27年12月5日（土）	34																																					
藤岡地域を巡る	平成29年11月4日（土）	34																																					

【実施年度】平成26年度～（継続）

②市コミュニティFMを活用した周知活動

【事業内容】市コミュニティFM番組「のんびり栃木散歩」内に文化財紹介コーナーを設け、市職員による紹介のほか、國學院大學栃木短期大学、学悠館高等学校歴史研究部、栃木高等学校SSHクラブ考古科学班、その他研究団体等が出演し、それぞれの埋蔵文化財に関する取組について解説している。

【予算額】なし

【実施年度】平成28年度～（継続）

③とちぎの古代遺産新発見（國學院大學栃木短期大学・奈良大学共同主催、市教育委員会後援）

【事業内容】國學院大學栃木短期大学と奈良大学による調査団が主体となり、中根八幡遺跡及び城内1号墳の学術調査を実施している。特に、中根八幡遺跡の発掘調査においては、遺跡への理解を深めるため調査現場を公開するとともに、小中学生向けの発掘体験講座や現地説明会の開催、学園祭での資料展示、地元産業祭での成果報告会の開催等を行い、遺跡の積極的な普及啓発活動に取り組んでいる。また、市では地権者交渉や市のイベント出演時の調整といった支援を行い、令和元年度には藤岡歴史民俗資料館にて企画展を共催で実施した。

【予算額】主催者負担（県補助金[栃木県大学地域連携活動支援事業]含む）

【実施年度】平成28年度～（継続）



写真3 収録スタジオの様子
（中根八幡遺跡学術調査団）



写真4 資料館展示チラシ

○取組の効果

①平成26年度より継続開催しており、例年多くの方に参加いただいている。埋蔵文化財関係講座では遺跡の見方や価値を体感できる講座とすべく、発掘調査現場や実物資料の見学及び調査担当者による解説を実施しており、参加者からは「新しい発見だった」、「遺跡に興味をもった」等の感想をいただいている。また、地元有識者や住民に案内役等の協力を仰ぐことにより、地域における文化財愛護精神の向上を図っている。

②市内の最新の埋蔵文化財調査状況の発信の場となっている。また、地元教育機関及び研究団体等の調査成果を発表する場として出演を依頼することにより、その研究活動の支援に繋がっている。

③教育機関が主体となり実施することで、市の負担軽減だけでなく、若手研究者の育成の場にもなっている。小中学生向けの体験講座や学園祭・産業祭での資料展示は、若い世代や埋蔵文化財と関わりのない人達に対し、遺跡への理解を促す貴重な機会となっている。また、これらの活動の継続により参加者や見学者は年々増加しており、遺跡の知名度向上に繋がっている。

○取組のアピールポイント

市、地元教育機関及び研究団体等の協力により埋蔵文化財に関する調査や普及啓発活動を実施することで、市の負担軽減だけでなく、若手研究者・アマチュア研究者の教育・活躍の場となっている。



写真5 中根八幡遺跡発掘体験講座

4. 大網白里市デジタル博物館の公開について

千葉県大網白里市教育委員会

取組名称	大網白里市デジタル博物館公開事業		
遺跡名称	大網山田台遺跡群など	取組の対象	市内外の方々
実施主体	大網白里市	共催等	なし
取組の目的	千葉県大網白里市では、展示施設がないため、インターネット上に「大網白里市デジタル博物館」を公開している。考古資料については、「遺跡が語る原始古代の大網白里」の中で、高精細画像や3D化した土器などを掲載している。その他、過去の企画展の展示風景を動画で公開するなど、デジタルならではの工夫をして、活用をしている。		
予算措置	公益財団法人図書館振興財団 提案型助成事業を活用		
予算額	21,679千円	実施年度	平成28年度～30年度
取組内容	○取組実施に至る背景 【コンセプトは「館を持たない自治体が提案する本格的デジタル博物館】 大網白里市には開発に伴う発掘調査から出土した遺物が多く収蔵されている。また中世～近代においては、交通の要衝として栄え、海岸地域ではいわしの豊漁により繁栄したことから歴史・民俗資料が数多く残されている。しかしながら、当市では、博物館や資料館・美術館といった展示施設を持たないために貴重な文化資源を有効に活用することができず、市民が文化財に気軽に親しむ機会が少なかった。 そこで、博物館に求められる「収集」「保存」「調査・研究」「展示」という機能を詰め込み、館を持たない自治体でも平易に資料等を公開できる「デジタル博物館」を構築することで新しい形の文化振興策を目指すこととなった。 ○取組の内容 【デジタル博物館の公開】 デジタル博物館を公開するにあたって、「美術館」「博物館」「資料室」「大網白里市を知る（アーカイブ）」などの機能別に分類した。そこからさらに「博物館」では、「古代」「中世」「近世」「近現代」と細分化し、資料を閲覧しやすいようにしている。 考古資料は、「遺跡が語る原始古代の大網白里」の中で時代別のページを展開している。 考古資料のURL：https://trc-adeac.trc.co.jp/Html/Home/1223905100/topg/iseki_entrance.html		

大網白里市／大網白里市デジタル博物館



写真1 トップページのイメージ

○取組の効果

【いつでも・どこでも閲覧が可能に】 デジタルアーカイブを検索・閲覧するためのクラウド型プラットフォームシステムの「ADEAC」で公開しているため、パソコンはもちろん、スマートフォンやタブレットPCでも容易に閲覧ができる。また、常設展示の環境がなかったために活用できていなかった大網山田台遺跡群出土の石器や縄文土器、墨書土器なども公開することができた。

【GPS機能を使って、文化財巡り】 「先人往来」歴史散歩道ウォーキングマップは、既存の文化財巡りのマップにGPS機能を追加して、初めての来訪者でも迷わずに文化財巡りができるようにした。スマートフォン片手にウォーキングができるので、観光振興や健康増進の効果も期待できる。

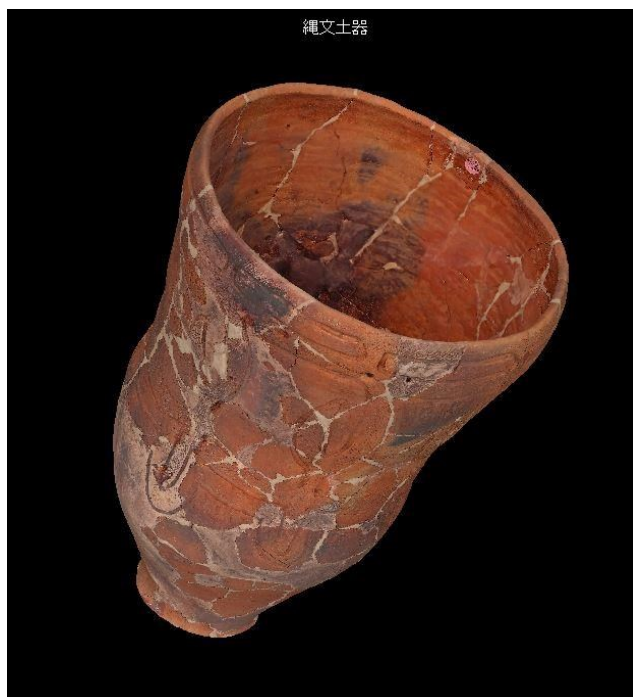


写真2 3D化した縄文土器

【小学校の社会科学習と連携】 令和2年に新型コロナウイルス感染拡大防止のために小中学校が休校となったことを契機として、市内の3～4年生向けに社会科副読本「わたしたちの大網白里市」の文化財紹介ページと連携したワークシートを作成した。一部の小学校では、「デジタル博物館を使って、市内の歴史・文化を調べて新聞にしよう」という課題が出されたり、小学校への出前授業の依頼があったり、学校現場での活用も広がっている。



写真3 写真と合わせて実測図も掲載

○取組のアピールポイント

【土器などの3D化】 一部の石器や土器などの立体資料を3D化した。正面や側面からの閲覧だけでなく、土器の内部を覗いたり、底部を確認したり、様々な角度から資料を観察できる。

【過去の企画展示のエア博物館】 一定の期間に、その場所でしか見ることのできない企画展示について、動画で公開している。平成30年2月～3月実施の特別企画展「大網山田台遺跡群から見る古代の大網白里」の撮影動画を公開している。

動画のURL：<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11E0/WJJS06U/1223905100/1223905100200060/ht000020>

5. 都市部の遺跡の強みを活かせ！たくさんの目と手と頭で遺跡を支える。

東京都西東京市

取組名称	中学生による縄文まちづくり提案と合同研究チーム「下野谷圧痕倶楽部」の活動		
遺跡名称	史跡下野谷遺跡	取組の対象	①中学生 ②対象限定せず
実施主体	西東京市教育委員会(コーディネイト)	共催等	都内大学, 下野谷圧痕倶楽部
取組の目的	下野谷遺跡は、南関東最大の縄文時代中期の集落遺跡であり、都市部に残された貴重な縄文のムラとして平成27年3月に国史跡に指定された。 下野谷遺跡では、都市部の縄文遺跡の保存活用のモデルケースとなることを目指し、周囲に多様、多数の人や主体が存在することを都市部の強みの一つと考え、協働事業に力を注いできた。遺跡を多くの人たちが支えるための道づくりとして、今回はそのうちの2つの試みを紹介する。		
予算措置	市単費・国庫補助事業費（地域の特色ある埋蔵文化財活用事業）		
予 算 額	①150 千円 ②1,320 千円(累計)	実施年度	①平成 27 年度 ②平成 25 年度～
取組内容			

○取組実施に至る背景

【① 中学生による縄文まちづくり提案】 西東京市では平成27年度に「西東京市文化財保存・活用計画」を策定している。この計画の策定にあたり、中学生を対象として下野谷遺跡や縄文時代について学び、地域資源として遺跡を活かしたまちづくりを提案する場を企画した。

【② 下野谷圧痕倶楽部】 縄文時代の環状集落が2つ隣接する下野谷遺跡では、大量の縄文土器が出土している。その土器に残る圧痕をレプリカ法で分析することを計画したが、膨大な数の土器片の分析にはたくさんの「目」と「手」と「頭」が必要である。そこで、土器や植物などを研究する考古学者だけでなく、考古学を専攻する大学生、市民が参加する合同研究チームを立ち上げた。

○取組の内容

【① 中学生による縄文まちづくり提案】

市内在住、在学の中学生を対象に募集し12名の参加者を得、まちづくりを専門とする大学教員の指導のもと、3回の活動で提案発表につなげた。

① 下野谷遺跡とその周辺でのフィールドワークの後アイディアを出し合う。

② まちづくり専門家の指導を受けながら提案をまとめる。

③ 一般公開での提案発表・意見交換会の実施



写真1 下野谷遺跡についての学習
と提案の作成



写真2 公開発表会



写真3 提案により実施された
縄文給食

提案をまとめる活動には、まちづくりを勉強している大学生にも参加してもらい、提案発表会のコメンテーターには、以前から下野谷遺跡の普及活動などに参加している地元の高校生を交えるなど、つながりの広がりを持たせる工夫をした。

提案は、史跡整備、広報・PR活動、まちへの活かし方など多岐にわたり、中学生の柔軟な発想に会場の参加者から大きな拍手が送られた。

【② 下野谷圧痕倶楽部の活動】

市内でみどりの保全などの活動をしており、下野谷遺跡での縄文の森の秋まつりにも協力を続けていた市民団体を中心とした市民メンバーと研究者、大学生、行政職員など十数名が不定期に集まり、平成25年度から活動をしている。研究成果は専門家による論文の基礎データにもなっており、下野谷遺跡の研究の特徴の一つにもなっている。また、その成果をもとに、大学博物館での展示、シンポジウムやワークショップの開催、冊子の刊行など活動の幅を広げている。ワークショップは、市域にある科学館と連携し、レプリカ法の講義を受けた大学生らが講師補助員となって行い、活動を通して他の機関との連携を強める機会としている。また、シンポジウムには倶楽部員の市民にも発表者として登壇してもらうなど、遺跡やその研究が専門家だけのものではないことが実感できる工夫をしている。



写真4

土器片1点1点を手にとり圧痕をさがす



写真5

体験ワークショップ



写真6

シンポジウム記録集など関連刊行物

○取組の効果

活動を通して遺跡やその研究を他人事ではなく、自分事として捉えるようになっていく様子が見えてくる。また、そのことで、遺跡への興味や愛着がより深まり、それを自分以外にも伝えたいという気持ちが芽生える。参加者が楽しそうに生き生きと取り組んでいる姿をみて、自分も関わりたいと思う人たちが現れる。このような連鎖が徐々にではあるが起ってきている。この連鎖が、遺跡に関わりたいという人と人のつながりを生み、遺跡を支える人が増加していくことが期待できる。

○取組のアピールポイント

都市部の遺跡の強みとして、遺跡の周囲に多くの人や団体、機関があることがあげられる。その強みを生かす試みとして、異なる年代が主体となった活動事例を紹介した。

遺跡の保護は、行政だけで行えるものではない。遺跡を支えるたくさんの応援団があつてこそ可能となる。遺跡を自分事として捉えることのできる機会をつくることが応援団を増やすことにつながる。

縄文まちづくり提案の一つから、市内の小学校などで「縄文給食」が実施されることになった。この給食を食べた子どもたちが、将来下野谷遺跡を支える多くの「手」や「目」や「頭」の持ち主になってくれることを祈りながら、一步一步取り組みを進めていきたい。

6. 史跡金沢城跡の調査研究成果を情報発信する取組

石川県

取組名称	史跡金沢城跡の情報発信		
遺跡名称	史跡金沢城跡	取組の対象	一般県民から熱心な歴史ファン
実施主体	石川県金沢城調査研究所	共催等	特になし
取組の目的	近世を通して、北陸の政治・経済・文化の中心であり、都市金沢の核として発展を遂げた金沢城について、その変遷や特徴を明らかにするため、石川県金沢城調査研究所では、平成14年度から金沢城跡の調査研究事業を進めてきた。その事業を実施する中で収集・蓄積された絵図・文献、埋蔵文化財、建造物、伝統技術（石垣）等資料の調査研究成果を相互に関連づけ、これまでに明らかとなった金沢城跡の変遷や特徴について総合的にとりまとめ、一般県民等内外に向けて情報発信をしてきた。そのさらなる充実と強化を目的とする。		
予算措置	県費、地方創生交付金		
予算額	以下の取組内容に記載	実施年度	以下の取組内容に記載
取組内容	○取組実施に至る背景 金沢城調査研究所では、金沢城跡の価値と変遷等を明らかにするため平成13年に発足し、翌年度から絵図・文献、埋蔵文化財、建造物、伝統技術（石垣）の4分野からなる調査研究事業を開始し、現在も継続して取り組んでいる。その間、平成20年には金沢城跡が史跡指定され、鶴ノ丸土蔵も石川門、三十間長屋に次いで重要文化財となっている。 調査研究事業の成果は、金沢城史料叢書や調査研究紀要、パンフレット等の印刷物にまとめ、情報発信を行ってきたが、一般の県民に対して積極的に行ってきたとは言えない状況であった。調査研究の成果がまとまるタイミングで実施してきたシンポジウムについても平成23年度以降実施していない状態でもあった。 そのような中で、スマートフォンの急速な普及と高機能化が進み、国内各地でデジタルデバイスを使用した、新たな情報発信が行われるようになってきていた。 また、平成27年3月の北陸新幹線金沢開業が迫り、観光誘客にも資する情報発信が求められていた。実際に、その開業効果は凄まじく、開業時の年間の観光客数は金沢城が約230万人、兼六園が約300万人に上り、その後も大きく落ち込まずに推移している。 ○取組の内容 金沢城調査研究所が実施している情報発信事業のうち、今回は二つの取組について紹介する。 【金沢城ARアプリ】県費（開発9,119千円（H25・26）、拡張6,200千円（H30）、保守845千円）（継続中） 「普通の観光案内では満足のできない熱心な歴史ファンに向けて」をコンセプトとして開発をしたのが、「金		



写真1 金沢城ARアプリのチラシ

「金沢城ARアプリ」である。

北陸新幹線金沢開業１年前の平成２５年度から開発に着手した。アンドロイド版を先行して平成２６年３月にリリースし、続いて同年９月にiOS版をリリースした。そして平成２７年３月、北陸新幹線金沢開業の１週間前に完全版及び多言語版（日・英二か国語対応）としてリリースした。その後、平成３０年には五か国語（日・英・中（繁・簡）・韓）対応を行い、機能の拡張として、文書の読み上げ機能等を追加実装した。

アプリの内容は、金沢城と兼六園、金谷出丸（尾上神社境内）の範囲に情報スポットを設けて、スマホのGPS機能を使い、そのスポットの反応する範囲に入ると、絵図、文献、発掘調査等の詳細な内容が画面に表示されるようにした。初心者から歴史ファンまで対応できるよう、三段階の情報としている。画面の読み上げボタンを押すとスマホの機能で音声読み上げを行うことができ、閲覧者が画面をただ読むだけでなく、石垣等の実物を見ながら解説が聞けるようになっている。

【金沢城シンポジウム】県費（720千円（R2）1／2は地方創生交付金）（H30～継続中）

平成３０年度から開催をしている。毎回テーマを決めて、所員と外部講師で構成し、金沢城跡の価値と特徴を丁寧に解説・発信するものである。

平成３０年度は「金沢城・加賀藩の庭園 - その歴史と特徴 -」、令和元年度は「近世城郭 金沢城の成立 - 本丸御殿の時代 -」と題して実施した。令和２年度についても実施予定で、現在その準備を進めているところである。

○取組の効果

金沢城ARアプリについては、ダウンロード数が一つの指標となる。46,082件（R2.6現在）がダウンロードされており、そのうち7,095件が外国のサーバでダウンロードされていることから、正確な数値ではないが約１５％は外国人観光客となっている。直に効果は実感しにくいものではあるが、着実に情報発信のツールとして機能している。

シンポジウムでは、過去２回の開催でいずれも３００人の参加を得ていることから、金沢城について知りたいと思われる一般県民は、潜在的に多く存在していることも分かり、今後の情報発信の在り方を考える材料ともなっている。

○取組のアピールポイント

GPS機能を使ったARアプリとすることで、実際に発掘調査等を実施した箇所でも詳細情報を取得することができる。また、スマホアプリにすることによって、一度現地で詳細情報を取得したスポットについては、いつでもどこでも確認することができる。随時更新可能なアプリとなっており、最新の調査成果についても掲載することが可能となっている。

シンポジウムでは、最新の調査研究成果を一般の方にも分かりやすい資料にまとめて報告している。



写真２ アプリ画面（繁体字）



写真３ シンポジウム会場の様子

7. 自粛期間中でもオンラインで文化財に触れる！

岐阜県飛騨市

取組名称	おうちで飛騨の縄文めぐり		
遺跡名称	島遺跡、塩屋金清神社遺跡	取組の対象	国民一般
実施主体	飛騨市教育委員会 (飛騨みやがわ考古民俗館)	共催等	石棒クラブ
取組の目的	例年、飛騨のゴールデンウィークは帰省や観光で賑わう。しかし、今年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止を目的とした移動自粛等により、例年と異なる状況であった。そこで、飛騨市に帰省できない方、飛騨市に旅行予定であった方はもちろんのこと、縄文好きの方などを対象に、オンラインで飛騨みやがわ考古民俗館収蔵品を発信する企画を実施する。 その企画の実施により、飛騨みやがわ考古民俗館の縄文土器・石棒等の埋蔵文化財が「ふるさと飛騨市」の貴重な地域資源として市民の誇りになることを目的とする。また、飛騨市の文化財を知ってもらうことにより、少子高齢化による人口減少が著しい飛騨市を応援する市外の人口を増やすことも目的とする。		
予算措置	なし		
予 算 額	0 千円	実施年度	令和 2 年度
取組内容	○取組実施に至る背景 1 例年実施している飛騨市の活用事業 3 本柱 飛騨市役所では、「市政見えるか講座」と名付けられた職員派遣講座を行っている。文化財を担当する文化振興課では、「身近な文化財について学んでみよう!」、「ドキドキ!!土器でわかる“いにしえ”の暮らし」と題した講座を担当している。依頼があると事業者と調整して、講座の目的を明確にし、遺物に触れての講義・土器作り体験など事業者のご要望に対応してプログラムを組んで実施している。この職員派遣事業は、市外の依頼にも対応する。 また、史跡江馬氏城館跡と史跡を目指す飛騨国司姉小路氏城館跡を舞台にして研究者による講演等、文化振興課主催の歴史講座も行っている。さらに、これらの活動を飛騨市の文化財 HP (http://hida-bunka.jp)、飛騨市の文化財 Facebook・Instagram などの SNS、YouTube を駆使して情報発信も実施している。多くの方の目に留まり知ってもらうことで、さらに飛騨市の文化財の存在価値が高まると考えている。 これら職員派遣・歴史講座・情報発信の 3 本を活用事業の軸に、昨年度には、市政見えるか講座等 13 件、歴史講座 5 件等を実施した。市政見えるか講座としては、保育園での縄文土器作り体験、歴史講座では高校生による歴史研究発表や、飛騨国司姉小路氏城館跡に関わる講演、石棒 1,000 本の撮影会など、参加者が文化財と触れ合う活用につとめていた。 2 職員派遣・歴史講座ができない令和 2 年の春 昨年度末頃から、新型コロナウイルス感染症拡大による学校休校、集会・イベント自粛などにより、職員派遣講座の依頼はなくなり、歴史講座も開催できない状況が続いた。このため、文化財が地域愛を育むために果たしてきた役割を担うための別の手立てを用意する必要が生じたのである。		

○取組の内容

【Zoom を用いたオンラインツアー】 大型連休中の令和2年5月3日（日・祝）、テレビ会議システムの Zoom を使って、飛驒みやがわ考古民俗館を舞台に、館の友の会とも言える石棒クラブと共にオンラインツアーを実施した。この計画策定に当たり、埋蔵文化財に「触れる」や普段の講座のように参加者との一体感を構築する「相互交流」になるべく近づけることを目指した。

事業内容は、伝えたい内容が煩雑にならないよう、飛驒みやがわ考古民俗館の考古展示を切り取って解説することとした。解説事項は、館の特徴である旧石器～縄文の通史、研究史、石棒製作遺跡と石棒の3点に絞った。また、普段入ることができない収蔵庫の収蔵資料を用いて展示解説に厚みを持たせた。

【相互交流を達成するために】 参加者との一体感の醸成・参加者間の交流を目指し、YouTube や Zoom のウェビナー形式でなく、Zoom のミーティング形式にて、参加者同士も交流可能な形で実施することとした。また、発信側と参加者側の理解の距離を埋めるために、ゲストに雑誌「縄文 ZINE」編集長・望月昭秀氏と土偶女子・菅田亜紀子氏をお招きして、随時質疑回答を行う形とした。チャット機能や Twitter にて参加者から随時あがる質問を、ゲストが考慮して発信側に質問することにより、参加者とギャラリートークに近い一体感を作り出すことができた。

○取組の効果

当日は、全国から170名の参加があった。参加者には、飛驒出身者だけでなく、活動自粛を余儀なくされている縄文ファンや博物館ファンも多く、ゲストとの質疑回答のやり取りやチャットによる参加者の意見交流が活発にみられた。結果、参加者アンケートの満足度は97%であった。ライブ感・一体感があるという意見が多く、主催側の意図と一致したものであった。また、現地に行って実物を見たいという意見もあった。報道対応では、テレビ局2社、新聞1社に取り上げられた。イベント後には二つの自治体、二つの機関の研究者から問合せもいただいた。飛驒市の存在を多くの方に知ってもらうことができ、さらに市の魅力の一つとして、飛驒市の文化財、飛驒みやがわ考古民俗館の存在が多くの方に伝わったと考えられる。

○取組のアピールポイント

飛驒市の文化財活用には2つの大きな目標がある。一つは、市民の飛驒市愛を醸成すること、もう一つは飛驒市ファンを増やすことである。令和2年5月3日のオンライン発信は、後者の目的である飛驒市ファンを増やすための手段として有効であった。いわゆる僻地の小さな自治体であるが、文化財を通じて全国に飛驒市のファンを増やし、人口減少先進地という社会的な課題の解決にも貢献していきたい。

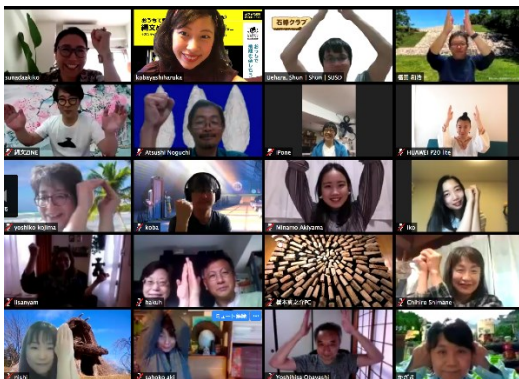


写真1 参加者の様子



写真2 収蔵庫から配信している様子

8. 日野町立桜谷小学校の戦国体験学習

滋賀県日野町教育委員会

取組名称	「総合的な学習の時間（桜タイム）」（戦国桜谷～桜谷歴史探訪～）		
遺跡名称	佐久良城跡、鳥居平城跡、園城跡、城山古墳群	取組の対象	桜谷小学校6年生（15人前後）
実施主体	日野町立桜谷小学校・日野町教育委員会	共催等	なし
取組の目的	地域の戦国史をテーマとし、桜谷小学校6年生を対象に、校区内に残る中世城郭遺構の見学や体験学習などにより、郷土に残る貴重な文化財に触れることで、地域の魅力や誇りとして認識する機会とし、将来、地域における文化財保護・活用の担い手を育成する。		
予算措置	小学校で予算措置		
予算額	10千円	実施年度	平成24年度～
取組内容	○取組実施に至る背景 平成24年の夏季に桜谷小学校の職員研修を行った際、6年生の担任教諭より「総合的な学習」で歴史を採り上げることとなり、テーマに関する相談を受けた。学校側の希望は、現地見学可能な校区の歴史に係る内容で、渡来人の伝承や戦国時代といったテーマが提案された。しかし、児童の要望は戦国時代が多く、校区内には中世城郭跡が数多く現存する町内の遺跡の状況などから「戦国史」をテーマとすることとなった。桜谷校区の戦国史をテーマに中世城郭跡の見学を中心とした「総合的な学習の時間（桜タイム） 戦国桜谷～桜谷歴史探訪～」というタイトルで事業に着手した。 ○取組の内容 初年度の平成24年度は、①レクチャー、②城跡見学（佐久良城跡と城山古墳群、鳥居平城跡、園城）③城攻め体験の3部構成で実施、平成26年度以降④紙製「頭形兜」製作体験を追加した。一方、平成30・31年度は③の城攻め体験は実施していない。これは、本事業は②の城跡見学が主目的で、児童の歴史授業への抵抗を減らす導入目的とする①は②とともに必須項目と位置付けたのに対し、体験授業の③④は児童の興味を上げ、各城跡の遺構の工夫などを体感・再確認させることを目的することから、担当教諭の選択項目と位置付けたためである。 【1. レクチャー】 本事業の導入、遺構見学の補足目的。1回目の授業で実施。①写真・動画等を使用し、近江や桜谷の戦国時代の状況、関係する土豪や城郭遺構、合戦方法などを解説。 ②平成25年度より、戦国時代に武士が所持した日本刀について、校区在住の刀匠を招き、作刀の解説や日本刀の見学、玉鋼や道具類に触れる体験を実施。さらに、武器として日本刀を使用した時代から武道として現代に伝えられている例として、古流剣術（三重県無形文化財 心形刀流）の演武を見学。		



写真1 校区在住の刀匠による解説・体験学習の様子

【2. 城郭遺構見学会1】 1の補足，導入を目的。各年度とも2回目の授業で，小学校直近の地域を治めた小倉氏の本拠とされ，良好な遺構が残る佐久良城跡（日野町佐久良）と小倉家菩提寺の仲明寺を見学。

【3. 城郭遺構見学会2】 2の補足を目的。3回目以降の授業で鳥居平城跡（日野町鳥居平）・園城跡（同川原）を見学。

【4. 体験学習1 紙製「頭形兜」製作】 1・2・3の補足が目的。平成26年度以降実施。①戦国時代前半の「頭形兜」を中心に，古代から戦国時代各期の甲冑の歴史やデザインの特徴などを解説。②実物大の紙製兜（頭形兜）をパーツの切り出しから製作までを体験。

【5. 体験学習2 城攻め体験】 平成24～29年度に実施。1・2・3の補足が目的。①戦国時代の合戦や城郭遺構の特徴について解説。②中世城郭に施された工夫を，楽しく学び，体感することを目的に，体育館内に佐久良城跡の主郭虎口や土橋，馬出状遺構をモデルとした模擬城郭を設け，模擬弓矢・槍などを使用した虎口攻防体験を実施。

【6. その他】 年度によって，児童の希望により，これらとは別に児童から直接質疑応答するための1時限を設定。その際は，城跡などに関わらず質問を受付，文化財保護の大切さを伝えるように心掛けている。

○取組の効果

①良好な遺構が残る城跡や関係寺院など貴重な文化財が地域に有ることを児童自身が知る機会となった。②冒頭に必ず解説時間を設けたため，小学6年生が地域の歴史だけでなく，関係用語などを学ぶ機会となった。③児童が体験内容を家庭内で話すことで，家族間・異世代間で地域の歴史や城跡などを話し合う機会となった。④学校と教育委員会が連携し，地域の人材を活用して郷土学習を行うモデルケースとなった。⑤年度ごとに壁新聞やパワーポイントなどにより報告会（対象は6年生のみ）が行われ，担当への感想が寄せられた。感想文では，現地見学について，「山だと思っていた場所が，地元にくくも残る城跡だということを初めて知った。」「機械を使わず深い堀や土塁が造られたことに驚いた。」「小倉という武将の素晴らしさがわかった。」，体験授業について，紙製製作で「本物と同じようで格好良い。」「兜の工夫が良く分かった。」「前立にいろいろな形や意味があることがわかった。」，城攻め体験で，「矢が思ったより飛んで楽しかった。」「矢が本物でなくて良かった。本当の戦はとても怖いと思った。」「枡形はすごい。」などが寄せられた。

○取組のアピールポイント

①規模・内容が異なる中世城郭跡を，通常のルートでは見ない遺構を見学することで，児童が遺跡を特別なものとして認識できる。②学校と教育委員会が連携しているため，小学校の時間割や事業に応じて，担当教諭が取組や組合せ内容の選択が出来る。③城跡の概要図や紙製頭形兜など，独自資料・教材を使用。特に，紙製兜では古式頭形をモデルとし，城攻め体験ではいわゆるチャンバラ的な要素を取り入れず，模擬の弓やつぶて，鎧など工夫を凝らし，可能な限り実像に近い形を想定した。



写真2 遺構の現地見学の様子



写真3 紙製兜を着用した城攻め体験の様子

9. 地域が誇る古墳群を、未来へ伝えるために

和歌山県立紀伊風土記の丘

取組名称	特別史跡岩橋千塚古墳群等の活用と市民との協働		
遺跡名称	特別史跡 岩橋千塚古墳群 和歌山県内遺跡	取組の対象	県民 特別史跡見学者（年間約 200,000 人）
実施主体	和歌山県立紀伊風土記の丘	共催等	なし
取組の目的	特別史跡岩橋千塚古墳群や本県の埋蔵文化財を活用した取組として、体験教室などの教育普及事業、ボランティアによる古墳ガイドや石室の限定公開などのフィールドミュージアムとしての活用、市民参加による埴輪レプリカ製作と古墳の復元整備などの特色ある事業があげられる。これらの取組を通じて、岩橋千塚古墳群が有する史跡の本質的価値や埋蔵文化財を活かした個性ある地域づくりに貢献する。		
予算措置	（特史）岩橋千塚古墳群歴史生き活き！史跡等総合活用整備事業及び県単独事業		
予 算 額	12,610千円 （前山 A58 号墳復元整備/平成 27～30 年度）	実施年度	平成 15 年度より継続
取組内容	○取組実施に至る背景 和歌山県立紀伊風土記の丘では、平成 9 年度より古墳群等の歴史学習の場としての活用を図るため体験教室（埴輪・勾玉づくりなど）などの教育普及事業を積極的に実施してきた。現在は平成 15 年度策定の整備計画及び平成 30 年度策定の特別史跡岩橋千塚古墳群保存活用計画に基づき、学校教育との連携や、歴史学習や生涯学習の場としての機能の強化を図りつつ、古墳群の整備と資料館の各種事業を一体化させた活用を進める。 ○取組の内容 【埴輪づくりなどの体験教室】 重要文化財大日山 35 号墳出土品をはじめ古墳群から出土した埴輪に対する関心を高める目的で、粘土で小型の埴輪をつくる体験教室「埴輪づくり」を発展させた「HANI-1 選手権」などの特色あるイベントを開催している。これは、参加者に高さ約 10～20 cm の独創性あふれる埴輪を制作していただき、来館者による人気投票で最多得票を獲得した作品に「埴輪王」の称号を与えるもので、これまで計 1,100 点を超える作品がエントリーされた。このほか、岩橋千塚古墳群や県内の埋蔵文化財への関心を高める目的で、古代の生活や「ものづくり」を学ぶ各種体験教室を、一般や、学校遠足・出前授業における児童生徒を対象に多数開催し、年間約 7,000 人が参加している。 【ボランティアによる古墳ガイド】 来館者が整備された古墳群を散策するあたり、その便宜を図るため、紀伊風土記の丘ボランティアのスタッフによる古墳ガイドや資料館内での解説を平成 23 年度より実施し、さらに石室の限定公開や古墳ガイドツアーなどの特定の日時のイベント開催時にも当館職員とともに解説を行っている。ボランティアには約 30 名が登録しており、地域の文化財をより深く知り、学んだ成果を活かす場としての生涯学習の機会を当館が提供するだけでなく、館と来館者をつなぐ重要な存在として、ボランテ		



写真 1 古墳の石室の解説を行うボランティア

ィアの役割はますます大きくなっている。

【市民とともに取り組む古墳の復元整備】

上述した歴史学習や生涯学習の場としての機能と、古墳群の整備とを融合させた取組としては、市民、ボランティアと当館職員の協働による埴輪レプリカ製作や古墳の復元整備があげられる。平成15年度より実施している古墳群の整備事業のうち、前方後円墳の大日山35号墳及び前山A58号墳の復元整備が該当する。復元古墳の上に並べる埴輪レプリカの製作を、一般の市民参加による体験教室「実物大埴輪をつくろう」により実施し、レプリカ作品の焼成と設置についても協力して取り組んだ。平成30年度に復元整備が完了した前山A58号墳については、設置した埴輪レプリカの製作に、試作品製作を含め小学生から80代までの県内外から延べ146人が参加した。当該古墳の「埴輪設置式・完成記念セレモニー」では、古墳時代の人々に扮した埴輪レプリカ製作者たちが作品を背負って丘陵斜面を登り、古墳上に設置し、さらに古墳時代の儀礼を再現するイベントを開催した。そこでは、発掘調査成果などを参考にして当時の飲食物供献の儀礼を再現し、首長、巫女などの各役柄を埴輪レプリカ製作者自身が演じている。

○取組の効果

各種体験教室の実施やボランティアによる活動は、古墳群を訪問する多くの人々へ特別史跡等の価値や埋蔵文化財を周知する効果がある。また、埴輪レプリカ製作にあたっては地域の児童生徒や家族、県内外からの参加者、ボランティアなど多くの人々が集い、その活動が古墳の復元整備という目に見えるかたちとして結実したことにより、古墳群に対する愛着や誇りを高め、より身近にある特別史跡として親しみをもていただく契機となった。前山A58号墳の復元整備では、参加者より次のような感想をいただいている。「長い年月を経て元の形を失いかけた古墳が、新たに整備された姿を目の当たりにすることで、我々はやっと当時の姿をうかがい知ることができる。また、整備されたものとそうでないものを比べ見ることで、時の経過を肌で感じる事ができた」(40代・和歌山市)。「自分が作成した埴輪を設置することができたのが感無量」(40代・兵庫県)。「当時の儀式を再現していたので、学校で学んだことを実体験することができ、大変有意義な時間だった。自分が住んでいる地域に、このようなたくさんさんの古墳が存在することを改めて実感することができ、誇りに思う」(10代・和歌山市)。

○取組のアピールポイント

以上の一連の取組は現在も継続しており、特に試行錯誤を繰り返しながら行う埴輪レプリカ製作は、市民やボランティアの方々の熱意がなければ実施が不可能である。こうした取組の継続が、特別史跡岩橋千塚古墳群を主要な柱とする個性ある地域づくりへとつながるものと考えている。



写真2 埴輪レプリカを製作する参加者



写真3 製作した埴輪レプリカを設置する参加者



写真4 古墳時代の儀礼を演じる参加者

10. 日本遺産のまち尾道を体験する～埋蔵文化財と日本遺産の活用～

広島県尾道市（尾道遺跡発掘調査研究所）

取組名称	尾道市内地域の特色ある埋蔵文化財活用事業		
遺跡名称	尾道市内遺跡（尾道遺跡を中心）	取組の対象	全市民（135,000人）
実施主体	尾道市	共催等	尾道市歴史文化まちづくり推進協議会・村上海賊魅力発信推進協議会・海事都市尾道推進協議会・原田町歴史文化同好会・尾道市教育委員会・社団法人因島観光協会
取組の目的	尾道市は、瀬戸内海に面した港町や芸予諸島、そして丘陵地域など、多様な地形と文化をもつ都市である。埋蔵文化財は、中世都市尾道が埋蔵された尾道遺跡や芸予諸島に点在する海賊の城跡、丘陵地域に点在する古墳群等、地域文化に連動して多様である。さらに、平成27年からの日本遺産制度により、3つの日本遺産をもつ都市となり、文化財を活用する機会は増加傾向にある。本取組は、埋蔵文化財のさらなる活用を図るため、日本遺産のストーリーとも連動させ、市民に対し歴史文化を体験する機会を増やし、埋蔵文化財や日本遺産を活用したまちづくりを進めることを目的としている。		
予算措置	地域の特色ある埋蔵文化財活用事業、日本遺産魅力発信推進事業補助金＋一般財源		
予算額	令和元年度：2,000千円	実施年度	平成27年度～令和2年度（継続中）
取組内容	○取組実施に至る背景 【歴史文化基本構想と日本遺産】 本市では、平成22年度に尾道市歴史文化基本構想・文化財保存活用計画を策定し、埋蔵文化財を活用する事業を計画的に実施してきた。取組内容に提示している事業は、全て活用計画に記載している事業であり、国庫補助金と一般財源で実施している。さらに、平成27年度から日本遺産制度が始まり、日本遺産による地域活性化計画にも、ストーリーに関係する埋蔵文化財を取り入れたことにより、埋蔵文化財と日本遺産ストーリーを連動させた取組を実施できるようになった。 ○取組の内容 【埋蔵文化財関連講演会】 尾道市の歴史や文化財と関係したテーマでの講演会。出土遺物に触れる機会も設定。 【埋蔵文化財関連展示会】 尾道市の歴史文化の様々なテーマで展示会を開催。日本遺産「箱庭的都市尾道」や「村上海賊」等の構成文化財も活用して、日本遺産村上海賊ビジターセンター等で開催。		



写真1 講演会での埋蔵文化財解説

【埋蔵文化財関連体験学習会】

縄文土器づくり、勾玉づくり、高速船やフェリーを活用した遺跡・資料館めぐり、文化財バス研修、埋蔵文化財塗り絵体験等、市内小中学生を対象に体験学習会を開催。

【埋蔵文化財広報パンフレットの作成、配布、Web 配信】

「尾道市の歴史と遺跡」シリーズとして、「村上海賊」「北前船」「銀山街道と西国街道」「塩の文化」「中世瓦」「中世陶磁器」等をテーマとしたパンフレットを作成し、市内関係機関、小中高校等に無料配布。また、市ホームページ等で Web 配信。日本遺産「村上海賊」では、「村上三家の至宝」「村上海賊の城」「瀬戸内海の城」「西国の海賊」をテーマとしたパンフレットをビジターセンター等で無料配布。

【埋蔵文化財貸出事業】

市内民間団体から申請があった埋蔵文化財を貸出、市内民間施設等で展示公開。

○取組の効果

取組内容は、尾道市歴史文化基本構想で文化財活用の方策として提示したものであり、これを毎年着実に実施したことにより、実績にもなり、今後の埋蔵文化財活用への予算確保にもつながるものとなった。また、市内小中学生だけでなく、幅広い世代に対応した事業であり、市民の歴史文化への興味関心を高めることにもつながった。日本遺産と連動させたことで、国内だけでなく、国外にも広く情報発信が進み、観光客（来訪者）増加（平成27年度観光客数 674 万人→令和元年度 682 万人）につながった。

○取組のアピールポイント

埋蔵文化財の保存と活用は、一過性のものではなく、継続的にかつ計画的に実施していくことで、より高い効果が生まれると考えられる。本市の取組の特徴は、尾道市歴史文化基本構想で、埋蔵文化財だけでなく、様々な文化財との連携や多様なソフト事業を、長期的な活用計画として設定し、その計画に基づき、実施してきたことにある。さらに、日本遺産制度が始まり、文化財の総合的な活用が求められてきたこともあり、埋蔵文化財の国内外への強力な情報発信も可能となった。こうした長期的な計画とそれを実現するための財源確保としての埋蔵文化財活用事業、日本遺産魅力発信推進事業等の国庫補助金の活用により、埋蔵文化財を通して本市の歴史文化を体験する様々な事業が実施できるようになった。

今後も、国庫補助の積極的な活用や他民間団体との連携により、市民が気軽に楽しめる事業や国内外に幅広く発信できる事業を実施していきたい。



写真2 埋蔵文化財パンフレットの配信



写真3 村上海賊の城跡などを体験する洋上セミナー

1 1. 長崎県埋蔵文化財センターにおける文化財の活用取組事例

長崎県埋蔵文化財センター

取組名称	1. 精密分析機器で調べてみよう 2. 長崎県立壱岐高等学校東アジア歴史・中国語コース支援		
遺跡名称	2. 原の辻遺跡ほか	取組の対象	1. 希望者（主に小学生） 2. 壱岐高校コース在籍生徒
実施主体	長崎県埋蔵文化財センター	共催等	—
取組の目的	1. 当センターが所有する精密分析機器を用いた体験学習を通して、参加者の文化財や自然科学に対する関心を高め、学ぶ機会とする。 2. 埋蔵文化財の専門機関として専門性の高い授業支援を行うことで壱岐高校東アジア歴史・中国語コース運営に協力する。		
予算措置	—		
予 算 額	—	実施年度	1. 平成 22 年度～継続中 2. 平成 15 年度～継続中
取組内容	1. 精密分析機器で調べてみよう ○取組実施に至る背景 - 当センターには各種顕微鏡や蛍光 X 線分析装置、赤外線反射画像撮影装置、透過 X 線撮影装置、3D スキャナー、3D プリンターなどの精密分析機器が揃っており、出土遺物の保存処理や調査研究等で利用している。 - 精密分析機器を一般の方が身近で目にする機会は少なく、機器の所有や用途についてあまり知られていない。 ○取組の内容 - 毎年、10 回程度実施している。1 回あたり 40 分で、精密分析機器を利用した体験学習を行う。開催時期は年によって異なるが、令和元年度は小中学校の夏休み期間である 8 月の毎週木曜・金曜に開催した。 - 壱岐の砂浜から採取した浜砂に含まれる貝殻片やウニのトゲの顕微鏡での観察、リモコンや時計など身近なものの透過 X 線撮影装置での観察、3D スキャナー・3D プリンターで作製した重要文化財「人面石」などのレプリカを使った観察など、職員の解説やクイズ、マジックを交えた体験学習である。		



写真 1 真剣に顕微鏡を覗き込む参加者

○取組の効果

- ・ 令和元年度は175名（過去最多）の参加があった。未就学児や小学生の参加が多く、その保護者らも参加した。また、お盆期間中は、帰省客や旅行客の参加もあった。
- ・ 令和元年度の参加者アンケートでは、「子供も大人も楽しめた」「はじめて知ることが多かった」という感想や、「研究の様子を見ることができてよかった」「もっと他の例も見たい」といった声もあり、リピート希望も多かった。

○取組のアピールポイント

- ・ 身近なものを目の前で分析・観察することで、より理解が深まり、さらに興味を引くことができる。
- ・ 職員の解説を交えて、普段見たり触ったりすることが少ない機器を使った体験学習ができる。

2. 壱岐高校東アジア歴史・中国語コース支援

○取組実施に至る背景

- ・ 長崎県では「高校生の離島留学制度」として離島に所在する県立高校5校がそれぞれ特色あるコースを設置し、県内外からの入学者を受け入れている。その中の一校である壱岐高校は、特別史跡原の辻遺跡をはじめとする東アジアとの交流を物語る歴史的遺産を数多く有する壱岐島にあるという立地を生かし、東アジア歴史・中国語コースを設置している。長崎県埋蔵文化財センターでは、埋蔵文化財の専門機関として考古学を中心とした授業支援を行うことで壱岐高校のコース運営に協力している。

○取組の内容

- ・ 年間30時間程度（1年生10時間、2年生20時間）の授業支援を実施している。1年生には博物館見学や島内遺跡巡検、原の辻遺跡発掘調査体験といった実際の遺跡・遺物に触れ歴史の面白さを体感してもらうような支援を行っている。また、2年生には奈良大学主催全国高校生歴史フォーラムに応募する論文作成の中で、考古学の専門的な知識や研究の仕方・技能を身につけることを目標とした論文指導を行っている。
- ・ 令和元年度からは夏休み期間中にまとまった時間を確保することができたことから、埋蔵文化財センターの指導の下、高校生による発掘調査も実施している。

○取組の効果

- ・ 平成29年度から、奈良大学が主催する高校生歴史フォーラムに毎年論文を応募して優秀な成績を修めており、近年では史学・文化財に関連する大学への進学者が増えつつある。また、歴史を専門的に学べるという理由で離島留学制度を利用して島外から進学してきた生徒も見られる。

○取組のアピールポイント

- ・ 実際の遺跡・遺物や専門的な知識に触れることで文化財に対する興味関心を伸ばし、高校生が進路として考古学・文化財学を選択することにつながる。
- ・ 論文執筆などの研究活動を行うことで、問題を設定しそれを解決するための方法を考える力を養うことができる。



写真2 高校近くの遺跡でのフィールドワーク

12. 史跡で読む西南戦争漫画

熊本県玉東町教育委員会

取組名称	史跡で読む西南戦争漫画		
遺跡名称	史跡西南戦争遺跡	取組の対象	一般
実施主体	玉東町教育委員会	共催等	—
取組の目的	玉名郡玉東町及び熊本市北区植木町に広域的に所在する国史跡西南戦争遺跡について、その歴史的意義や発掘調査の成果等をわかりやすく若年層等に紹介し、さらに実際に現地に訪れてもらうために漫画の制作等を行った。		
予算措置	熊本県地域づくり夢チャレンジ推進補助金		
予算額	2,362 千円	実施年度	平成30年度～令和元年度
取組内容	○取組実施に至る背景 熊本県玉名郡玉東町は、熊本県北に位置する人口5千人程の町である。町域には、明治10（1877）年に起きた国内最後の内戦「西南戦争」の遺跡が多数残っており、平成25（2013）年には隣接する熊本市に所在する田原坂等とともに7箇所が国史跡として指定を受けた。これらの保存活用の取組として、例年下記のようなイベントを行っており、多数の参加をいただいている。一方で、「西南戦争」という近代の歴史は複雑で理解しにくいのか、若年層の参加が少ないという課題があった。また、平成23～27年度にかけて、小中学生を対象とした副読本の作成・配布（熊本市・玉東町域）も行ったが、子供たちが手に取って積極的に読まれることが少なかった。そこで、西南戦争について視覚的・直観的に興味をもってもらい、史跡について理解を深められるよう若年層にむけた漫画の制作を行った。 例年実施している玉東町における埋蔵文化財活用に係るイベントは、次のとおりである。 ・西南戦争歴史講座…多角的に西南戦争を学ぶために様々な分野の講師に講演いただく連続講座。隣接する熊本市と共同で平成22年度より例年5回程開催している。毎回80名程度の参加がある。 ・西南戦争歴史検定…史跡についての知識の定着を図り、ガイドを育成する目的で実施。初・中・上級試験を開催している。過去6回の実施で延べ325人が受験。合格者は初級123人、中級33人、上級2人。 ・西南戦争遺跡巡りウォーキング…点在する史跡を巡るウォーキングで平成21年より実施。ガイド（検定試験合格者も活躍）が現地で案内する。約500人参加。 ・玉東フットパス…史跡や町に残るありのままの風景を見ながら歩く。現在コースは4つあり、年間2～4回イベントを実施。		



写真1 漫画冊子（本編）と続編周知のチラシ
QRコードより本編が閲覧可

○取組の内容

【西南戦争漫画本編制作】 熊本で活躍されているイラストレーターで漫画家のむらいけんたろう氏に作画等を委託し、玉東町教育委員会が監修を行った。本編は冊子（A5版、本文32頁）の形式で、町内小中学生に地域学習の教材として配布した（初年度は小学6年～中学3年までに配布。以降は毎年小学6年・例年50人前後を対象に配布する予定）。また、一般の方は史跡西南戦争遺跡ホームページより自由に閲覧できるようになっており、冊子は観光案内所で有料頒布を予定している。



写真2 史跡のひとつ二俣瓜生田官軍砲台跡にて続編にアクセス

【続編制作とweb掲載】 上記漫画制作に

引き続き、続編の3編（二俣砲台編、吉次峠編、木葉編）を制作した。これらは、史跡を構成する各遺跡の観光案内看板に表示したQRコードからアクセスして初めて閲覧できる形となっている。

続編は、町内の小中学生が地域に残る伝承やエピソードを古老から聞くストーリーになっており、本編には掲載できなかった伝承を盛り込むことで「生の歴史」を現地で味わってもらう内容となっている。

また、続編を設定した各遺跡は、前頁で紹介した玉東フットパスコースの通過地点となっており、フットパスの一つのコンテンツとして楽しめるような仕掛けとなっている。

〈続編のストーリーの内容〉

- ① 二俣編…横平山古戦場での両軍抜刀隊による斬り合いは、まるで稲妻が走るようにキラキラと光って見えた。実際の刀での斬り合いは転がり回って時代劇で見るチャンバラとは違った。
- ② 吉次編…吉次往還の両脇に壕（堡壘）があった。
- ③ 木葉編…戦後の写真を撮った上野彦馬を案内した木葉住民（実在）の話。

○取組の効果

漫画本編（冊子）は、地元小中学生の地域学習の教材として活用している。指導教員によると、子供たちはキャラクターに好感を持ち自ら進んで漫画を読むため、事前学習促進に役立っているという。また、一つ一つの専門的な単語についても漫画で学んでいるため、学習を進めやすく、現地へ行くことを楽しみにしている子供もいるという。

続編については、一般ヘチラシやホームページで周知を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、現在、周知を保留しているところである。今後、本編を観光案内所で有料頒布し、観光客へ続編の閲覧を促す取り組みを行っていきたい。

○取組のアピールポイント

史跡に係る史料や伝承を、漫画（ストーリー）として読むことでより身近な“生の歴史”として感じてもらえるものとなっている。是非、現地でその雰囲気を感じ、漫画を通して学んでほしい。

13. 「本物」に触れる, 「親しみやすい」文化財への取組

宮崎県都城市

取組名称	埋蔵文化財保存活用整備事業		
遺跡名称	市内遺跡	取組の対象	小中学生, 一般市民
実施主体	都城市教育委員会文化財課	共催等	特になし
取組の目的	本事業は, 出前授業や各種体験学習会などを通して, 埋蔵文化財に直接触れる機会を増やし, 多くの市民に地域の歴史を身近に感じてもらい, 地域の歴史への興味や理解を深めてもらうことを目的としている。「本物」に触れることができる, 「親しみやすい文化財」を目指している。		
予算措置	地域の特色ある埋蔵文化財活用事業費国庫補助金		
予算額	2,000 千円	実施年度	平成22年度からの継続事業
取組内容	○取組実施に至る背景 調査出土品を単に公開するだけでなく, 埋蔵文化財に対する知識や深い理解のために, 社会・地域住民への積極的な普及啓発の推進が求められている。 このため, 埋蔵文化財の活用を通して「本物」の郷土の歴史に触れ, 地域への誇りや郷土愛の醸成を目指すため, 平成22年度から継続的に実施している。 ○取組の内容 1. 出前授業, 各種体験学習会の開催 【出前授業・講座】 市内の小中学生対象の出前授業と, 一般市民対象の出前講座を行っている。 職員が出土品を持って市内小中学校等へ出向き, 発掘調査からわかった市内の歴史を紹介している。市内の代表的な出土品をそろえて出前キットを作成しているが, それにプラスして授業や講座を行う地域の調査出土品を持っていく。 出前授業では, 市内の古墳(地下式横穴墓)から見つかった本物の人骨(頭骸部)もキットに加え, 人骨からわかる男女差や当時の平均寿命・身長などを説明する。また, 市内で検出された縄文時代の竪穴住居や古墳時代の地下式横穴墓の原寸模型を作成し, それも説明に用いている。 【体験学習会】 市内の小中学生対象と一般市民対象の体験学習会を行っている。 小中学生対象として, 市名の由来である「都城跡」での城跡探検や, 国指定史跡大島畠田遺跡歴史公園での体験学習会・夏休みを利用した歴史資料館での体験学習会も開催している。一般市民対象としても, 「都城跡」やその周辺の城跡散策などを行っている。 また, 年に1回外部講師を招き, 様々なテーマで歴史シンポジウムを開催している。令和元年度は古墳をテーマとして実施し, 初の試みとして地下式横穴墓のVR体験を行った(写真1)。また, シンポジウムの導入として, 市内の古墳やその特徴を紹介する動画を作成し, 上映した。		



写真1 VR体験の様子

2. 広報資料の作成

市内の歴史について広く周知するために、市内遺跡マップや国指定史跡大島畠田遺跡パンフレットを作成して配布している。また小学校低学年でも歴史に親しんでもらえるよう、都城の歴史を題材とした絵本『むかしむかしのみやこんじょ』を作成し、小学校・図書館・児童館などへの配布や読み聞かせを行っている。

さらに、市広報誌の『ぼんちくんと歴史探訪』というコラムで史跡の紹介を行い、それに合わせて動画やHPを利用してコラムの内容をより詳しく紹介する場合もある。動画はFBも活用して広報を図っている。

3. 企画展・巡回展の開催

毎年小学生を対象として、都城歴史資料館において各時代やテーマに沿って企画展示を行っている。また、市立図書館等市内各所において巡回展示も行っている。令和元年度は古墳をテーマとして、資料館での企画展では、展示ケースの中に地下式横穴墓の内部を再現し、ケースの外側から覗ける仕掛けを作った。令和2年度の巡回展示では、等身大の人形を作成し、発掘現場の再現展示を行った。その他にも顔出しパネルを作成して記念撮影の場を設けたりもしている。

○取組の効果

- ・出前授業については、市内の小中学校に周知を行っており、令和元年度は年間57回実施、のべ2,615名の参加があった。おおむね6年生の歴史の授業開始に合わせて授業を行うことが多い。

- ・原寸模型を用いた効果としては、模型の中に寝転んで内部の広さを実際に体感できるなど空間把握がしやすい（写真2）。

- ・人骨（本物）を用いた効果としては、驚きやちょっとした恐怖で子どもたちの興味を惹きつけることができる。

- ・都城跡での体験学習会では、甲冑（紙製）を着て弓矢体験や武将とのチャンバラ対決（写真3）など様々な体験活動を行いながら城跡を歩くことで、楽しみながら地域に残る文化財を学ぶことができる。また同伴した保護者から「こんな城跡が残っているとは知らなかった」などの声もあり、保護者世代にも「都城」という城跡の周知が進んでいる。

- ・大人向けの城跡探検では、古絵図を片手に歩くことで、絵図に描かれている城の構造が現在も残されていることを知ってもらう機会となる。それによって、「このままの状態で保存して欲しい」といった保存整備の要望もいただくなど、市民の文化財保護意識の醸成へつながっている。
- ・子ども向けも大人向けも毎年同時期に開催することで周知が進んでおり、リピーターも増え、リピーターが新たな参加者を呼び込む流れもできつつある。

○取組のアピールポイント

- ・多くの「本物」に触れる体験
- ・遺構や等身大の人形等の模型・VRを取り入れることで、文化財への「親しみやすさ」の演出
- ・保存活用事業で使用するものは、ほとんどが職員による手づくりであり、低コストでの事業推進
- ・幅広い世代への埋蔵文化財の周知のため、一つ一つの事業を継続して行うこと



写真2 地下式横穴墓の原寸模型



写真3 都城跡でのチャンバラ対決

埋蔵文化財の活用に関する取組事例にご応募いただいた組織とその概要

No	都道府県	組 織	概 要
1	北海道	今金町教育委員会	石器づくりセミナーや疑似発掘体験会などからなる「ピリカ遺跡まつり」を、地元高校生を含むボランティア組織と共催して史跡ピリカ遺跡を会場に毎年実施。
2	福島県	(公財) 福島県文化振興財団遺跡調査部	小中学生を対象とした縄文遺跡の発掘体験ツアーや製鉄遺跡をテーマとした歴史講演会、発掘調査の成果報告会などを実施。
3		須賀川市	大学と共同で古墳の調査を実施。参加学生が市民に発掘調査の説明を行う。 ※「埋蔵文化財専門職員の育成について（報告）」で事業概要を紹介
4		福島市	重要文化財「しゃがむ土偶」を通して、福島市の縄文遺跡を PR する取り組みを実施。
5	栃木県	壬生町歴史民俗資料館	大学と合同調査を実施。地元自治会との交流や学生主体の現地説明会、ボランティアによる小学生向けの見学会等を実施。
6	群馬県	藤岡市教育委員会	発掘調査に際し「発掘ニュース」を月 1 回発行し、周辺地区に回覧。その結果、遺跡の現状保存に関する地元の理解が醸成。
7	埼玉県	桶川市歴史民俗資料館	市民団体と連携して、小学 5・6 年生を対象に出土土器の観察や土器づくりをなどの博学連携事業を実施。
8		鳩山町教育委員会	町内の窯跡遺跡への理解促進を目的として、武蔵国分寺と同じ文様の軒瓦や土師器坏などを古代の技法で作る体験事業を実施。
9	神奈川県	茅ヶ崎市教育委員会	史跡の市民学習会を年 4 回、地域住民と協働で行う勉強会を毎月 1 回開催。市民、市民団体等と連携して史跡を活用する連絡会を発足。
10		海老名市教育委員会	過去の発掘調査現場の映像をデジタル化した動画やドローン撮影映像を Youtube で公開。市HPと現地案内板に添付した QR コードからもアクセス可能。
11	新潟県	(公財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団	年 3 回の企画展と年 10 回前後、講演会を開催。子供向けに校外学習・職場体験の受け入れを行うほか、出前授業や少年少女考古学教室を年 4 回実施。
12	石川県	(公財) 石川県埋蔵文化財センター	学習講座や古代体験に加え、手軽に学べる体験重視のミニ講座の実施や市町村事業と連携した「石川まいぶん博士」の認定を実施。
13	福井県	美浜町教育委員会	発掘調査成果や出土品をテーマとした学際的な内容の歴史フォーラムを実施。その講演録を作成し、郷土史研究 に還元。
14	山梨県	北杜市	史跡梅之木遺跡公園において、竪穴建物づくり体験学習会を実施。石斧製作、木材の伐採などの資材調達から始め、建物 1 棟を 1 年かけて復元する本格的な体験学習。 ※「埋蔵文化財専門職員の育成について（報告）」で事業概要を紹介

15		菰崎市教育委員会	地域内の文化財の把握と調査を兼ねて「ふるさと歴史再発見ウォーク」を実施。グッズの製作・販売による文化財の魅力を発信。
16		甲斐市教育委員会	信玄堤（包蔵地）の現地解説を実施。通説の解説ではなく「実はこうだった」という知的好奇心を刺激しつつ、歴史的事実を伝えること心掛けて解説。
17		山梨県文化財センター	商業施設や図書館等で「マチナカ博物館」を開催。「本物に触れる」をコンセプトに、拓本、文様つけ体験等の実施。古墳巡り用のウォーキングマップ作成や古墳を専門職員と巡るイベントを開催。
18	静岡県	浜松市	尾張系埴輪出土古墳の調査成果公開のため、埴輪用語書道体験・埴輪形クッキー作りや近隣市と連携した企画展・ギャラリートーク等を開催。
19		伊豆の国市	文化財に対する興味や理解を深めること目的に市内外の小中学校に遠足ルートに古代体験メニューを取り入れを提案する取組を実施。
20	岐阜県	大垣市教育委員会	現地見学会、講演会や写真展、地区センターを会場に絵画土器をモチーフとした音楽劇など未整備の遺跡の活用を NPO 法人と連携して実施。
21	愛知県	瀬戸市	「市民の選んだ4つのせとモノがたり」として HP 上に物語形式で市内の文化財を紹介。市内文化財をたどるマップを多言語で作成。
22	三重県	三重県埋蔵文化財センター	3 ヶ年で DVD「三重のれきし発掘隊！」3 巻を制作し、県内の全小学校に配布。他にも子ども体験イベント、出前授業等を実施。
23		四日市市教育委員会	埋蔵文化財及び整備中の史跡久留倍官衙遺跡で市民ボランティアとの協働や市内外の公共施設と連携した活用事業等を実施。
24	京都府	向日市教育委員会	体感具、歴史学習ゲーム配信、独自の手話解説動画作成、歴史教室開催。遺跡見学前に遺物や電子黒板を用いた動画を用いた学習等を実施。 ※「適正な埋蔵文化財保護体制の構築について（報告）」で概要紹介
25	大阪府	羽曳野市教育委員会	史跡の古墳外濠外堤の一部で巨大古墳の雄大さを体感できる絶好のビューポイントを花畑として市民に公開。
26		八尾市教育委員会	被災した埋蔵文化財を再整理し、その再整理資料により埋蔵文化財の保護の重要性を普及するための展示・公開を実施。
27	兵庫県	淡路市	史跡五斗長垣内遺跡では、地域住民や大学、行政等が連携して保存・活用に向けた取り組みを展開。 ※「令和元年度埋蔵文化財担当職員等講習会一発表要旨」で概要紹介
28	奈良県	田原本町教育委員会	史跡公園で AR を活用したアプリケーションを開発し、当時の風景を擬似的に復元し、来園者の理解を促進。
29	和歌山県	和歌山県教育庁	遺構を立体型取りした“高精細レプリカ”により半地下式倉庫跡で遺構をリアルに復元し、「屋外型ユニバーサルミュージアム」として活用。
30		かつらぎ町教育委員会	大型堅穴建物を立体剥取した遺跡や一部復元整備した古代寺院跡の現地学習会や展覧会を住民団体と協働で実施。
31	島根県	大田市教育委員会	石見銀山の調査研究成果の市民向け概説書として刊行。地域の歴史や文化・自然等をテーマとした講座の開催と地域学「石見銀山学」の形成。

32		出雲弥生の森博物館（出雲市）	バックヤード見学、発掘調査速報展や講演会、企画展等を開催。地元小学校と連携し、西谷墳墓群で弥生時代の墓上祭祀の再現などを実施。
33		益田市教育委員会	未整備の城跡で遊歩道沿いの草刈りや樹木の枝払い、落ち葉掃除後、研究者等の解説を受けて城跡を巡る市民参加イベントを実施。
34	広島県	福山市教育委員会	周知の埋蔵文化財包蔵地の性格・内容から、地域の自然災害の歴史を把握し、その成果を市民へフィードバック。危機管理防災担当課とも連携。
35	徳島県	鳴門市教育委員会	市立図書館リニューアルオープンにあたり、その一画に展示コーナーを設け、市内各遺跡から出土した遺物を展示。
36		長国埋蔵文化財実行委員会（牟岐町・阿南市・小松島市・（公財）徳島県埋文センター）	徳島県南部に所在したとされる国名の長国を冠して、徳島県南部の2市1町と徳島県埋文センターが連携して展示・講演会を実施。
37	熊本県	阿蘇市教育委員会	県内最大級の前方後円墳の調査や県指定を記念した展覧会、平成28年熊本地震被災建造物の修理等の公開を文化財所有者と連携して実施。
38		八代市	平成28年熊本地震で被災した八代城跡の保存修復過程等の公開を通じて地域の災害史や先人達の災害克服の歴史を周知し、防災意識を啓発。
39	鹿児島県	霧島市教育委員会	発掘体験や県立埋蔵文化財センター等のバックヤードツアー、ミニチュア土器の接合・復元体験を実施。
40		徳之島町教育委員会	徳之島3町が連携・協力して実施している水中遺跡の調査に関するパネル展を実施。

概要欄末尾に印した※印の報告等は、文化庁ホームページ及び全国遺跡報告総覧で公開しています。

事業詳細についてはそちらをご覧ください。

(<https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/maizo.html>)

(<https://sitereports.nabunken.go.jp/ja>)